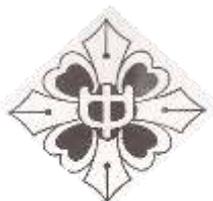


令和7(2025)年度

学校評価・自己評価 報告書



岩見沢市立緑中学校

対象校	岩見沢市立緑中学校				
学校長	小野 篤夫		教職員数	35 名	
	1 年	2 年	3 年	特別支援	合計
学級数	3	3	3	3	12
生徒数	76	84	83	15	258
住所	岩見沢市北本町西 2 丁目2-1				
電話	0126-22-0669				
FAX	0126-25-7143				
URL	https://www.city.iwamizawa.hokkaido.jp/midorichugakko/4068.html				
E-mail	midoric@edu.hamanasu.com				

1 令和 7 年度学校経営方針

2 学校評価アンケート

- ・ 分析概要
- ・ アンケート結果の具体

3 学校評価ミーティング評価結果

令和7年度 学校経営方針

はじめに

人工知能、IoT 等に象徴されるように、先端技術が高度化してあらゆる産業や社会生活に取り入れられた Society5.0 時代が到来しつつあり、社会の在り方そのものが劇的に変わる状況が想定されます。新型コロナウイルス感染症の拡大により、人々の生命や生活、価値観や行動、経済や文化など社会全体に影響を与え、また、近年は夏の猛暑により教育課程の見直しを図る必要性が生じるなど、予想困難で複雑化する時代が到来しつつあります。

このような状況下において、子どもたちにとって学校とは、子どもたちが将来直面する社会の劇的な変化に対応できる資質・能力と人間性培うため、一人一人の人間として尊重され、居心地のよい空間となり、嬉々として学ぶことができる場所でなければなりません。

本校の生徒は、現在、暴力・悪質ないじめなどの重大事案はないものの、本人や家庭の不安定さ等に起因する不登校や教室で学習できない、集団になじめない生徒の増加、よりよく判断する自己決定力、存在感、表現力、協働する力等々が十分に身に付いていない状況が見られます。

しかし、生徒一人一人に目を向けると、素直で、優れた資質・能力を備えており、意図的に認め、良さを引き出し、伸ばし、学級集団として成長させることで、前述の「子どもたちにとっての学校」を創造することができるようになると思います。

そのため、生徒を主体とした生徒に寄り添う日常指導により自尊感情や自己有用感を育み「傾聴・受容・共感」の信頼関係に基づく仲間づくりを進めること、自らを律し困難にもめげない心を培う教育活動を推進することと同時に授業づくりを展開していくことが必要です。

令和6年度、経営方針のキーワードを『チームで創る～共有・協働・貢献～』として組織的な学校運営を目指すべくスタートしました。特に生徒の意見を取り入れながら、全教職員が共有・協働・貢献により同僚性を高め、これまで以上にチームで創るということを意識し、学年団を軸とした形で新しい時代に対応できる力の育成を寄与してくれました。令和7年度はこれまでの成果を踏まえ、「チーム力の向上」と「チームによる創造」を図りながら、様々な活動を通して本校の生徒が煌めく学校づくりを推進していくため、以下のとおり経営方針を示します。

I 経営の方針

キーワード **チームを生かす ～ 共有・協働・貢献～**

【共有】

学校がチームとして成果をあげるためには、確固たる目標が必要です。それが学校教育目標であり「めざす生徒像」です。まず、目の前の子どもたちを「どのように育てたいのか」「どのような姿がゴールなのか」を明確にすることが重要です。そして、その姿を教職員全体で「共有」することが大切だと考えます。

【協働】

私たち教職員は何かの縁により緑中学校で巡り会いました。年齢、教職経験年数、信条などに違いはあっても、意見が食い違っても「子どもたちのために」という共通の目標があるからこそ利害関係を捨てチームで動くことができます。「チーム分掌」「チーム学年」「チーム特別委員会」等、教職員個々の強みを結集し、弱みをチーム内で補うことが大切だと考えます。

【貢献】

チーム貢献を考えることによって個人も組織も成長します。教職員個々の専門性や強みを生かし、チームの目標達成のために貢献することが大切だと考えます。

※「成果をあげるには、自らの果たすべき貢献を考えなければならない。手元の仕事から顔を上げ目標に目を向ける。組織の成果に影響を与える貢献は何かを問う。そして責任を中心に据える」（ドラッカーの著書より）

II 令和7年度の重点事項《組織的な学校運営は、授業の組織化・指導の組織化から》

- 1 新しい時代に対応できる力を培う個別最適な学びと協働的な学びの追究
 - ・校内研修を核とした統一感のある授業づくりの推進と生徒が自ずと学びに向かうための取組の工夫
- 2 支持的・親和的な人間関係を育むピア・サポートプログラムの推進
 - ・信頼関係に基づく仲間づくり、「傾聴・受容・共感」の学校文化を醸成する授業と日常活動の推進
- 3 生徒指導の実践上の視点に基づく教育活動による自己指導能力の育成
 - ・自己存在感の感受、自己決定の場の提供、共感的な人間関係の構築、安全・安心な風土の醸成

III 経営の重点

- 1 「新しい時代に対応できる力」の育成
 - (1) 基礎・基本（知識・技能）の習得、活用する力（思考・判断・表現）、学びに向かう力を高める教科等の指導の推進
 - ① 1単位時間45分授業のデザインと45分授業実施における留意事項の整理
 - ② 各教科等における目標及び課題設定の工夫と各教科等の内容に基づく「指導と評価の一体化」につながる授業づくりへの見直し
 - ③ 「学習規律」の徹底と「学習スキル」の向上による「学びに向かう力」の育成
 - ④ 生徒が自ら判断し、デジタル社会を安全に行動できる資質・能力の育成（デジタル・シティズンシップを理念とした情報活用能力の育成）
 - ⑤ 多様な学びの機会の積極的な提供による学力向上（セルフ・スタディ・タイムの実施、OKスタディ等への参加促進等）
 - ⑥ 生徒一人一人のニーズに対応した多様な学びの場の確保と取組の工夫
 - (2) 生徒一人一人の能力や可能性を伸ばすインクルーシブ教育の充実
 - ① 生徒の教育的ニーズに応じた支援の工夫、特別支援教育コーディネーターを中心とした組織的指導体制の充実
 - ② 生徒一人一人の実態把握を踏まえた個別の教育支援計画、個別の指導計画に基づく指導の工夫
 - ③ 保護者との連携と信頼関係の構築、関係諸機関との連携
 - ④ 生徒を知る、生徒に知ってもらうための教職員個々の取組の工夫
 - (3) 意欲的な研修をとおした組織的な指導体制の確立
 - ① 組織化された授業づくりを推進する校内研修の充実
 - ② 教員相互が授業力を磨き合い高め合う授業交流、OJTの活性化
 - ③ 各種研修会への参加と研修成果の共有、外部講師の積極的な活用
 - ④ 課題意識をもった研修会への参加と参加後の振り返りと還元を学校運営に生かす工夫
 - (4) 鉄北三校間における積極的な連携・接続
 - ① 鉄北地区三校交流と連動した授業づくりの共有化と教育課程の検証・改善
 - ② 目指す子ども像を共有するための授業参観・情報交流の日常化（小学校における教育成果の継承）
- 2 「豊かな人間性」「健やかな体」の育成
 - (1) 生徒理解に努め、ふれあいを大切にしたい心の通う生徒指導の推進
 - ① 自尊感情や自己有用感を育む生徒理解に立った心に寄り添う日常指導の充実
 - ② 支持的・親和的な人間関係を育む岩見沢型ピア・サポートプログラムの推進
 - ③ 生徒に関する情報の即時共有と全教職員による一致した指導体制の確立
 - ④ 不登校傾向の生徒や集団になじめない生徒の減少、いじめを見逃さない積極的な生徒指導の推進（教育支援センター等関係諸機関及びSCとの連携、学年の枠を越えた組織的な指導体制の確立等による発達支持的・課題予防的・困難課題対応の生徒指導）
 - (2) 強い意志で正しく行動する心を培い、実践的態度を育てる道徳教育の推進
 - ① 「考え、議論する」道徳の授業づくりへの実践
 - ② 全教育活動を通じた道徳的实践力の向上

- (3) 自主的・実践的な態度を育てる特別活動
- ① 目指す生徒像を共有した学年・学級活動及び生徒会活動の充実、自己を高める意識の高揚と自治的能力の向上
 - ② 生徒のどのような力を育成するかを明確化し、学校生活に秩序と変化を与え、集団への所属感を高める学校行事の推進
 - ③ 人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力の育成を目指すキャリア教育の充実
- (4) 生命を尊び、自らを律する健康・安全教育の推進
- ① 強健な心身を培うスポーツへの参加奨励と充実
 - ② 健康な生活に資する学校保健・安全指導の充実と自分の身を守る行動の指導・習慣化
 - ③ 危機管理、危機回避の共通理解と全教職員による組織的対応
 - ④ 地域・PTA等との連携・協力による不審者への対応や地域安全活動の活性化
 - ⑤ 食育、性の指導、薬物乱用防止等の指導の充実（外部指導者の活用等）
- (5) 豊かで温かみと落ち着きのある教育環境づくりの推進
- ① 備品等の計画的整備・廃棄等と掲示スペース等を有効活用した環境整備
 - ② 地域・保護者等と連携した、学校に潤いをもたらす活動の推進（花壇・生け花・茶の湯等）
 - ③ 効果ある予算執行と計画的な教育環境整備
- 3 「信頼される」学校づくり
- (1) 社会に開かれた教育課程による創造的な教育活動の推進
- ① 児童生徒の顔が見える第一小学校、北真小学校との日常的な連携
 - ② 地域の自然や人材、施設・設備を生かし、教科等を横断した課題解決的な学習や探究活動へと発展させる総合的な学習の時間の改善・充実
- (2) 家庭・地域との緊密な連携を図り、その願いや思いを真摯に受け止め、地域の誇りとなる信頼される学校づくりの推進
- ① 鉄北地区学校運営協議会（岩見沢市コミュニティ・エリア構想）に基づく地域とともに歩む学校づくりの推進
 - ・ 地域の行事や事業への積極的な参加と地域社会の中で学ぶ教育活動の推進
 - ・ 生徒会活動等とおした地域貢献活動の推進
 - ・ 学校の説明責任を果たし、学校力の向上を図る学校評価の改善・充実
 - ・ 緑中の良さを発信する機会の積極的な設定
- (3) 学校における「働き方改革」の推進
- ① 『岩見沢市立学校における働き方改革行動計画』、『岩見沢市の部活動の在り方に関する方針』を基盤とした取組の推進
 - ② 「共有・協働・貢献」による組織的 school 運営の推進と教職員間のコミュニケーションを基本とした「何でも相談できる、チームプレーを大切にする」職員室文化の醸成

学校評価アンケート

岩見沢市立緑中学校

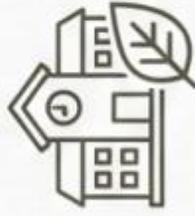
令和7年度 学校評価アンケート 分析・総括報告

成果の可視化と今後の教育活動に向けて

対象：生徒・保護者・教職員

期間：令和7年度

全体総括：安心・安全な環境の確立と、学習指導の「見える化」への課題



学習環境と安全性の向上

UD（ユニバーサルデザイン）の徹底と「チーム担任制」により、落ち着いた学習環境が実現。職員の96%が環境の整備を肯定的に評価。



指導方法への理解

生徒は「協働的な学習」や少人数指導を高く評価しているが、保護者・教職員の理解度には乖離がある。授業の「ブラックスボックス化」解消が急務。

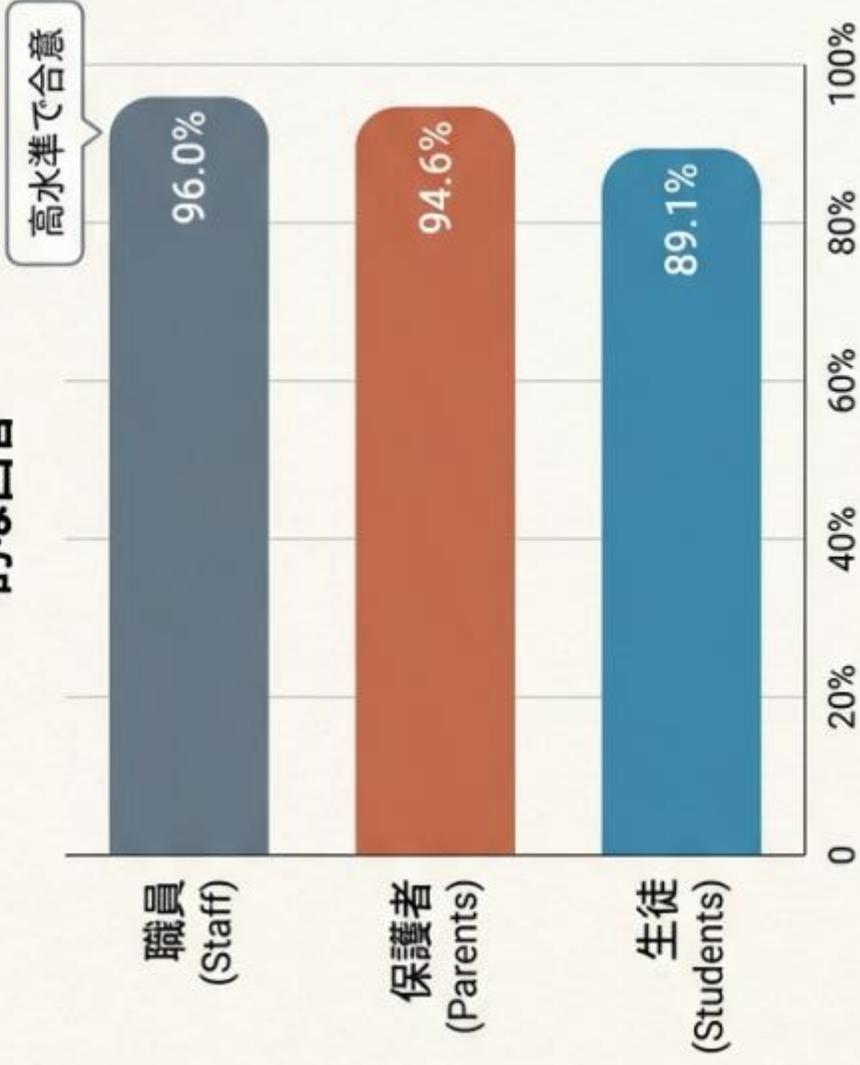


時間の使い方

下校時刻の変更で自由時間は増加したが、「学習時間1時間未満」の生徒が約6割。時間の「量」ではなく「質（自己調整力）」の課題が浮き彫りに。

学習環境：UD（ユニバーサルデザイン）の徹底がもたらした「落ち着き」

「きれいで落ち着きのある学習環境」への肯定的な回答



■ 成果の要因 (The Story)

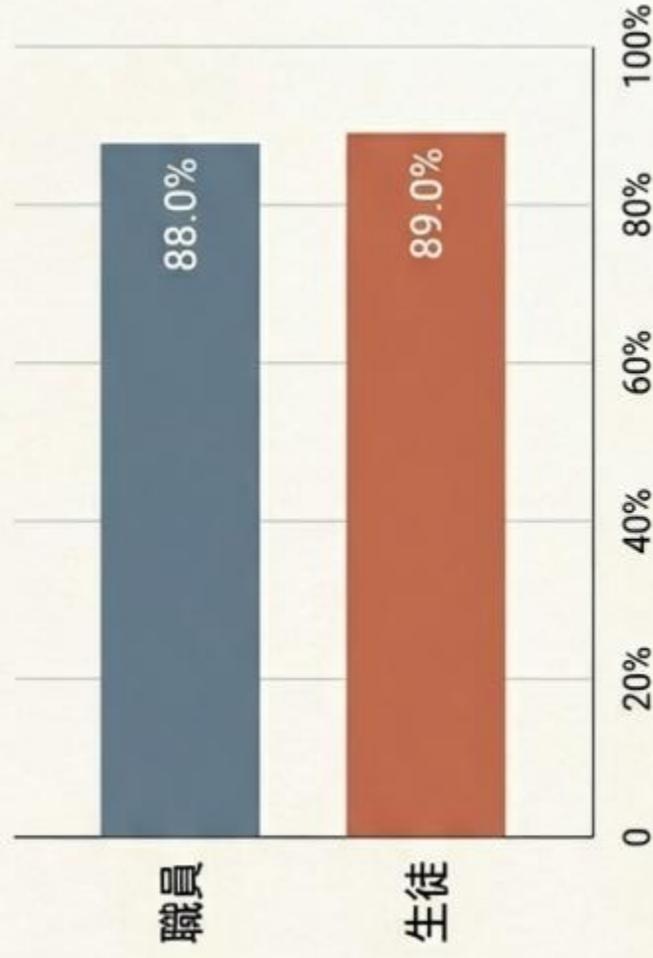
昨年度から継続している「掲示物のユニバーサルデザイン化」が奏功。教室や廊下の掲示物を全校・学年で統一し、視覚的なノイズを減らしたことで、生徒が学習に集中できる環境が整った。

■ 今後のアクション (Action)

- 基準の維持：「今、生徒にとって何が必要か」を常に問い直す。
- 職員間での定期的な掲示物レビュー（内容・場所・時期）の継続。

安心・安全：相談体制の充実と「チーム担任制」の成果

「安心して生活できる場所になっている」



※「よく当てはまる」の回答率は前年比11.5ポイント減少

■ 成果の背景 (The Story)

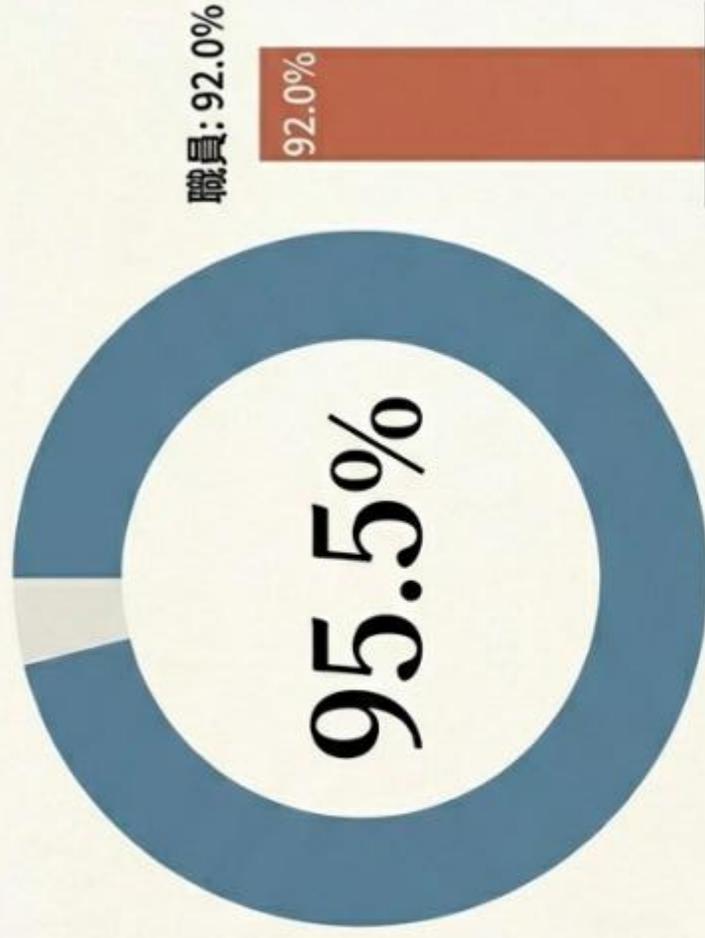
全学年での年2回の教育相談に加え、1年生における「チーム担任制」が、生徒にとって相談しやすい雰囲気を作り出している。複数の教員が生徒を見守る体制が機能している。

■ 課題と対応

肯定的な評価が高い一方で、最上位評価（よく当てはまる）の減少は注視が必要。「当てはまらない」と感じている「声なき少数派（サイレント・マイノリティ）」を見逃さないため、生徒指導の4機能（自己存在感、共感、自己決定、安全）を軸とした関わりを徹底する。

授業改善：「協働的な学習」は生徒の学びに定着している

授業で「話し合い活動」や「協働的な学習」がある



生徒の肯定的評価

■ 分析：生徒主体の授業への転換

生徒の9割以上が、授業内で「話し合い」や生徒の9割以上が、授業内で「話し合い」や「協働」の機会があると感じている。これは、教師が一方的に教える授業から、生徒が中心となる授業への転換が成功していることを示している。

■ 次なるステップ

「活動がある」段階から「活動の質が高い」段階へ。教科の特性に応じた、より深い対話や学び合いのデザイン（授業改善）を進める。

課題：数学・少人数指導における「評価のギャップ」

1年生 数学 (少人数指導)	保護者・教職員
 <p>生徒 97.1% (効果を実感)</p>  	 <p>評価が低い・横ばい</p>
2・3年生 数学 (チームティーチング)	保護者
 <p>生徒</p>  <p>(前年比)</p>	 <p>保護者</p>  <p>(前年比)</p>

なぜギャップが生まれるのか？ (The Black Box Problem)

保護者は授業の様子を直接見ることができないため、「チームティーチング」や「少人数指導」の具体的なメリットや仕組みを理解できていない。結果として、「誰が責任を持っているのか」「本当に学力がつくのか」という不安につながっている。

Strategic Action 「授業の広報」が必要。指導法の名称だけでなく、それによって「子供がどう変容したか」という事実を保護者に伝える。

1学年「チーム担任制」：生徒の安心感 vs 大人の戸惑い



「相談できる先生がたくさんいて安心」



先生がたくさんいて、話しやすい
人に相談できるのがいい。



誰がうちの子の担任なの？
責任の所在がわからなくて不安。



情報共有が大変。誰が対応したか
不明確になりがち。

解決策：役割とルールの明確化

生徒にとっての「心理的安全性」というメリットは維持しつつ、大人（保護者・職員）向けには「誰が窓口か」「どう情報共有しているか」を可視化し、安心感を醸成する。

中1ギヤップの解消：小中連携の成果



成功の要因

小学生段階での異学年交流や、丁寧なオリエンテーションが功を奏し、入学時の不安低減に成功した。

今後の展開

この「適応の成功」という具体的なデータを保護者に積極的に発信し、入学前の不安を解消する。また、イベント的な交流だけでなく、日々の力リキョラム連携を強化する。

校内生活：時間の「意識」と「運用」のズレ



新しい日課・時間を意識して
行動できている

生徒は自分たちが主体的に動けていると
感じている（高いエージェンシー）。



教職員の認識



「5分休みでは移動教室への移動
が間に合わない場面がある」



物理的な動線やスケジュール設定
に無理があるという懸念。

改善の方向性



生徒を指導・注意するのではなく、学校側の「物流・動線」を見直す。
生徒が時間を守れるような環境（タイムマネジメント）を大人が再設計する。

家庭との連携：アプリ「tetoru」の活用と課題



メリット：即時性と負担軽減

「tetoru」導入により、欠席連絡や緊急連絡の即時性が向上。
保護者の負担軽減に寄与。

課題：情報の分散

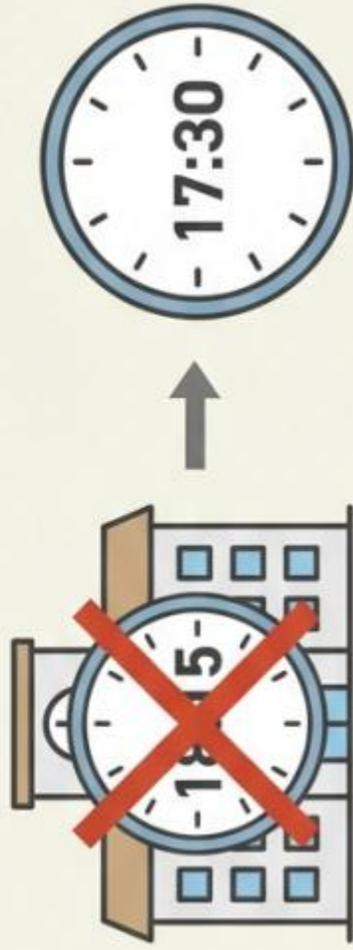


情報発信の整理と質の転換

- ・媒体の使い分けルールを明確化する（緊急はアプリ、保存版はプリント等）。
- ・「事務連絡」だけでなく、「子供の良い姿（Good News）」をアプリで発信し、保護者との信頼関係（エンゲージメント）を高める。

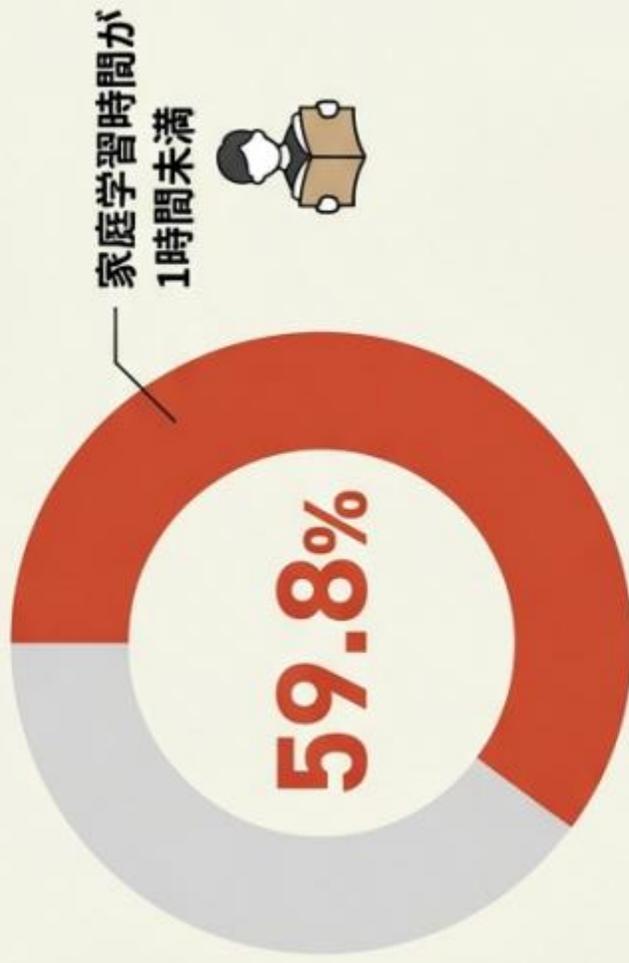
生活習慣のパラドックス：自由時間の増加 ≠ 学習時間の増加

夏季下校時刻の変更



自由時間の増加（3時間以上が約6割）

深刻な問題

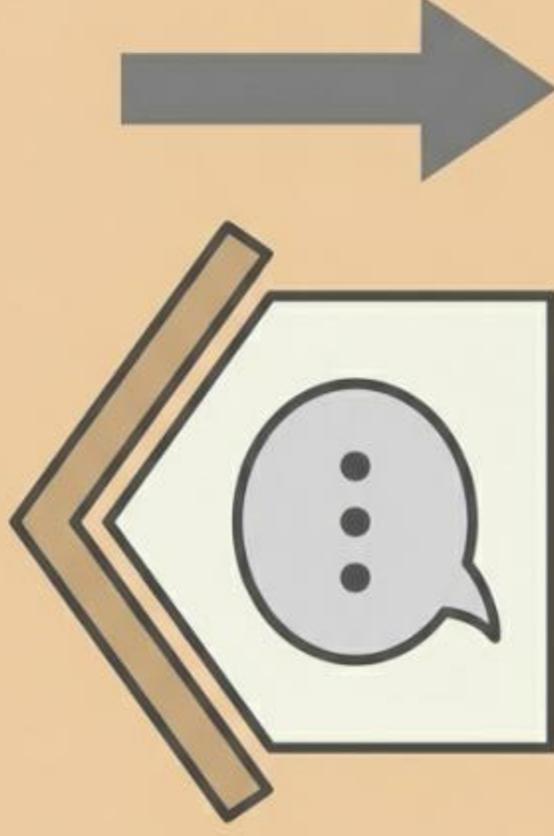


分析と対策



時間は増えたが、それをどう使うかの「自己調整力」が生徒に不足している。「宿題をやりなさい」という指導から、「自分の時間をどうデザインするか（タイムマネジメント）」を考えさせる指導への転換が必要。

家庭での会話：学校の話題が減少傾向



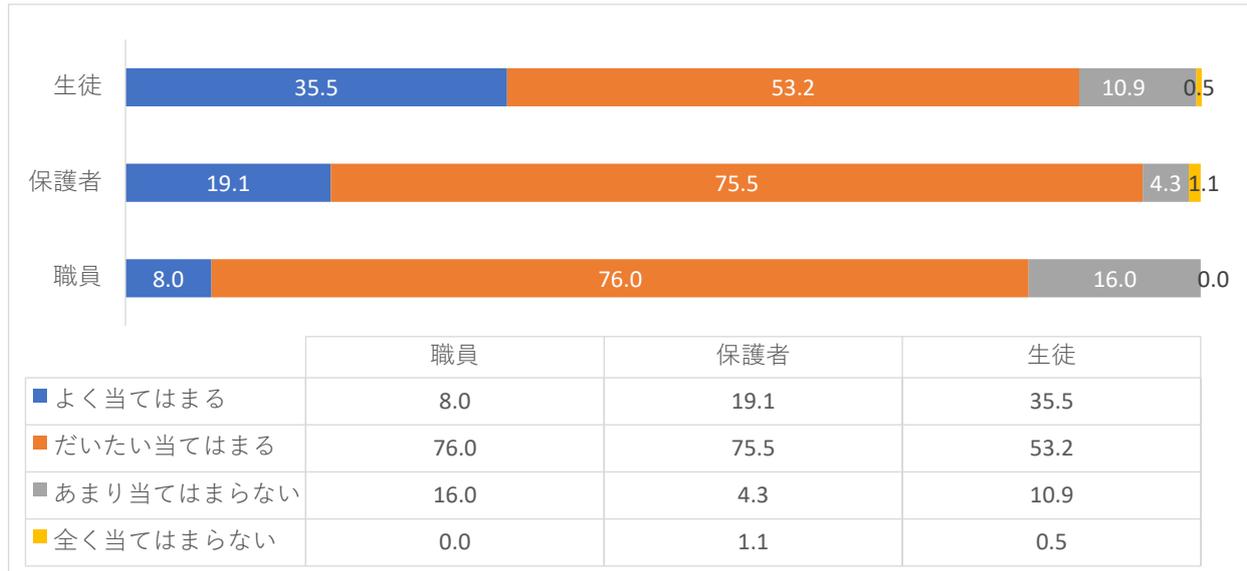
学校での出来事を話す割合：5.8ポイント減少

会話のきっかけを作る

学校での会話は、子供の心理的安全性のバロメーター。tetoruなどを活用し、「今日はお子さんに○○について聞いてみてくださいください」といった具体的な「会話の種類（トピック）」を学校から提供する仕掛けを行う。

I. 学校について

1 学校の教育活動全般について満足しているか



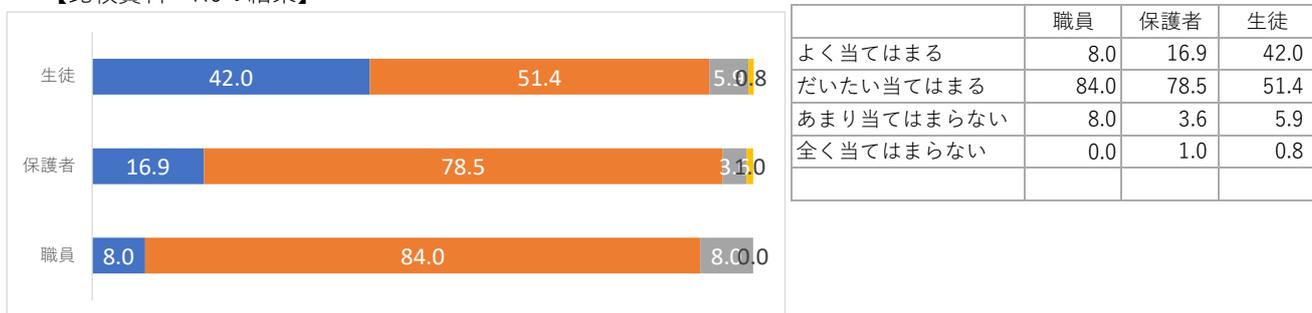
○分析

- ・生徒の88.7%、保護者の94.6%、職員の84.0%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答し、教育活動に対して比較的高い満足度を示している。
- ・昨年に比べて、生徒の「よく当てはまる」が4.7%減少、「あまり当てはまらない」が5.0%増加しており、3年生の回答が大きく影響している。
- ・昨年に比べて、「よく当てはまる」が保護者で2.2%、職員で8.0%増加している。

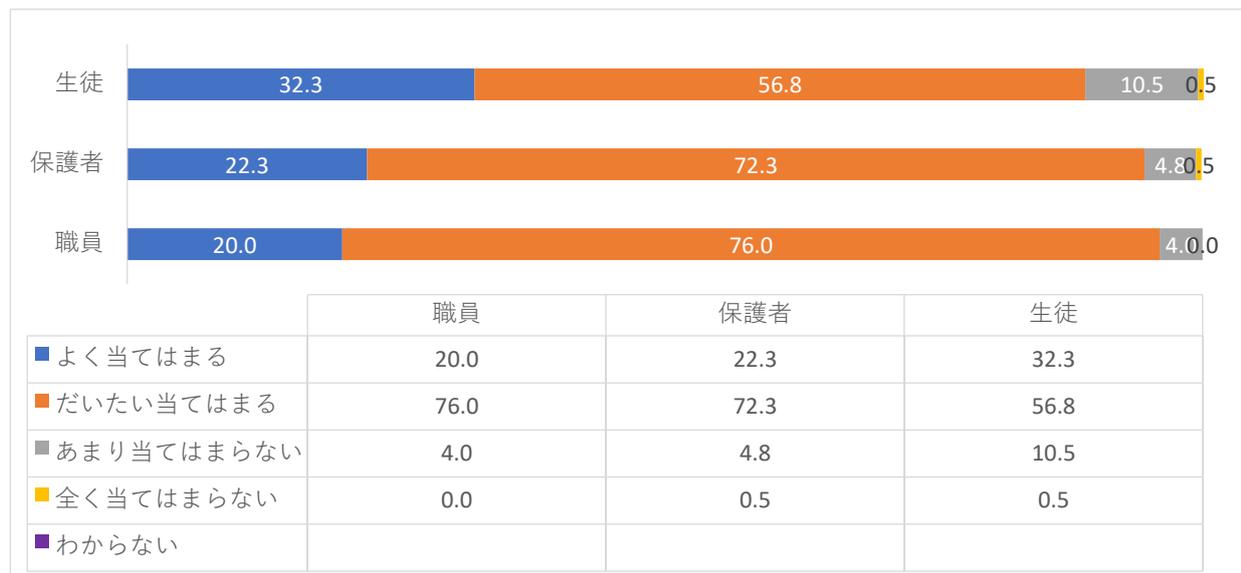
○総括

- ・教育活動全般に関して、生徒、保護者、職員のいずれも高い満足度を示し、学校全体の教育活動に対して良い評価を得ることができている。引き続き、生徒がより良い学校生活を送ることができるよう、「一人ひとりの力を伸ばす」「目標を立て、やりがいを感じる」教育活動を展開するとともに、その取組の発信に一層力を入れていくことが求められる。
- ・3年生の「あまり当てはまらない」が16.4%、「全く当てはまらない」が1.4%と1，2年生に比べて10%程度多く、日課や授業時間の変更により、学校生活が変化したことが考えられる。

【比較資料：R6の結果】



2 学校は、きれいで落ち着いたある学習環境を整えているか



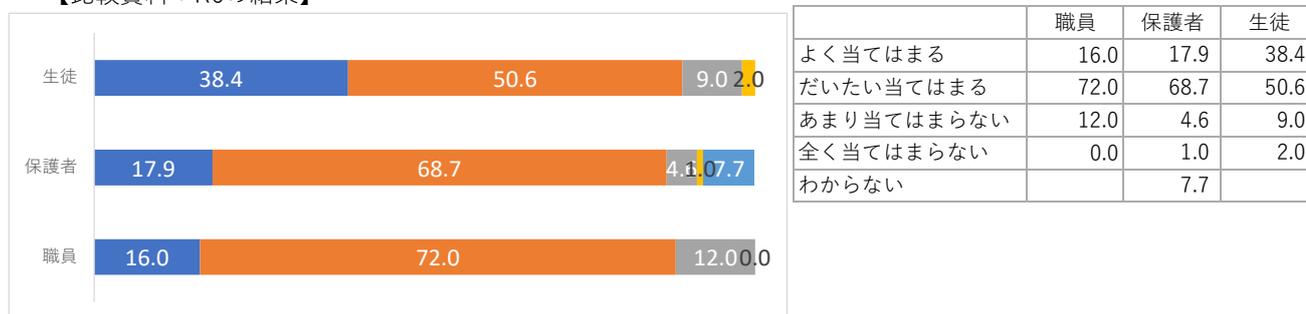
○分析

- ・生徒の89.1%、保護者の94.6%、職員の96.0%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答し、学習環境に対して高い満足度を示している。
- ・昨年に比べて、「よく当てはまる」が生徒で6.1%減少しているが、保護者で4.4%増加、職員で4.0%増加している。

○総括

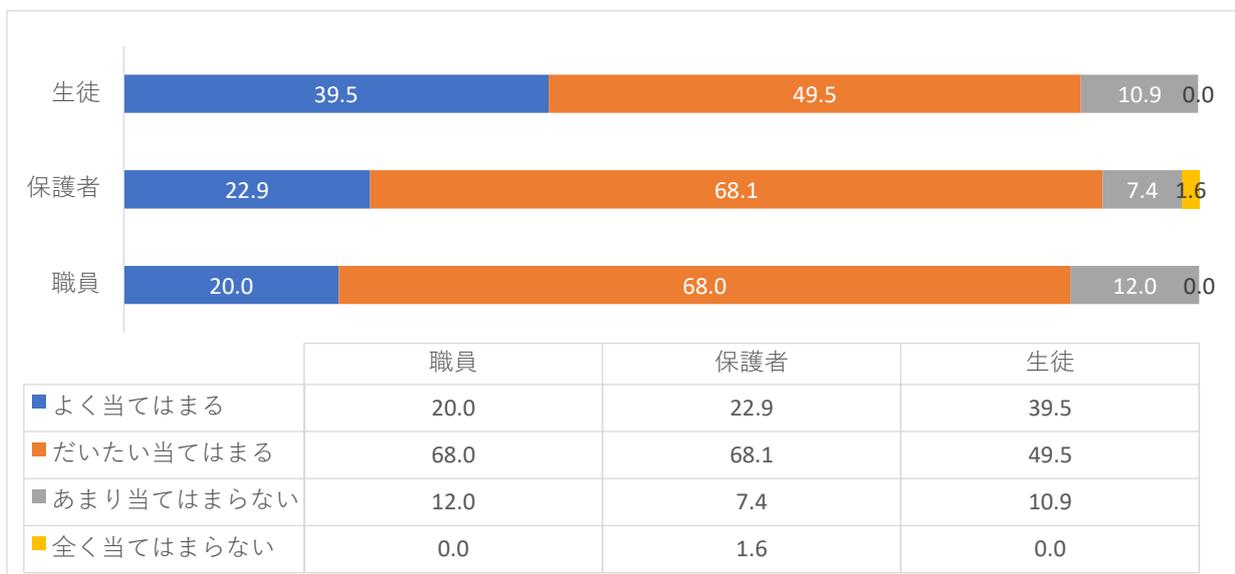
- ・学校の学習環境について、生徒・保護者・職員のいずれも比較的高い満足度を示し、学校の学習環境整備に対して良い評価を得ることができている。
- ・昨年度から行った「UD（ユニバーサルデザイン）型の教室内の掲示物」や「廊下の掲示物」、「全校や学年内で統一した掲示物」の工夫などを継続した結果であると考えられる。今後も「今、生徒・学校に必要なことは何か」「どのような掲示物を示すことが有効か、効果が高いか」など、職員でアイデアを出し合い、掲示物の内容と掲示場所、掲示の時期、期間を検討していきたい。

【比較資料：R6の結果】



【三者比較】

3 学校は、皆さんが自分自身の成長を感じることができ、安心して生活できるような場所
 になっているか



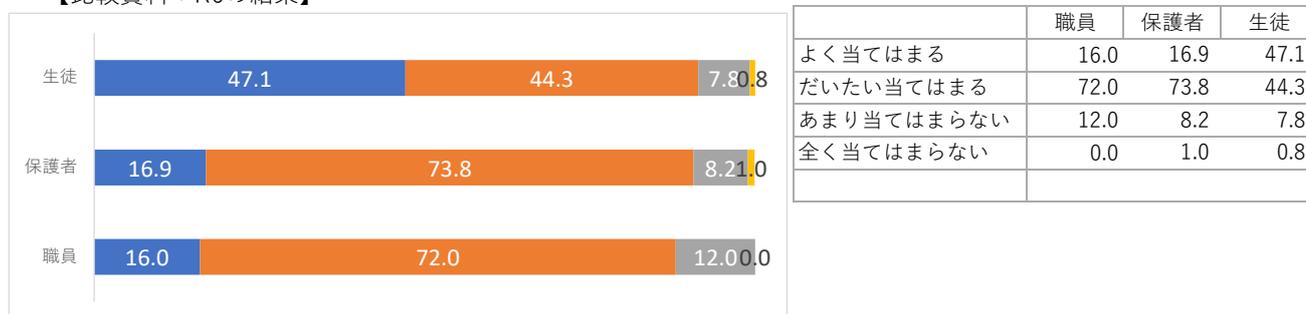
○分析

- ・生徒の89.0%、保護者の91.0%、職員の88.0%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答し、学校の指導に対して高い評価を示している。
- ・昨年に比べて、生徒の「よく当てはまる」が7.6%減少している。
- ・昨年に比べて、「よく当てはまる」が、保護者で6.0%、職員で4.0%増加している。

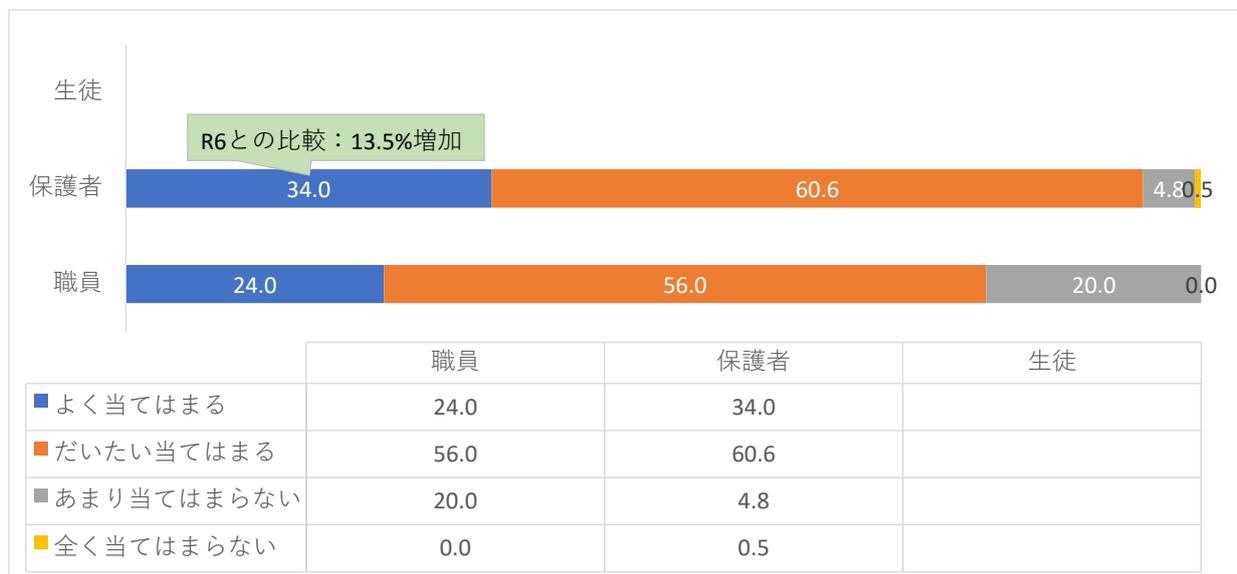
○総括

- ・職員の88.0%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答し、今年度の学校の指導に一定の成果を感じている。全学年で教育相談を年に2回実施し、1学年ではチーム担任制を導入し、生徒との関係性を強める中で、教師に相談しやすい雰囲気や生徒と成長や課題を共有する取組も行われた。
- ・「あまり当てはまらない」と回答した1年生の2.9%に対して、2年生が11.4%、3年生が17.8%と多く、日課や授業時間の変更により、学校生活が変化したことが考えられる。

【比較資料：R6の結果】



4 学校は、教育方針や教育活動の様子をわかりやすく説明しているか



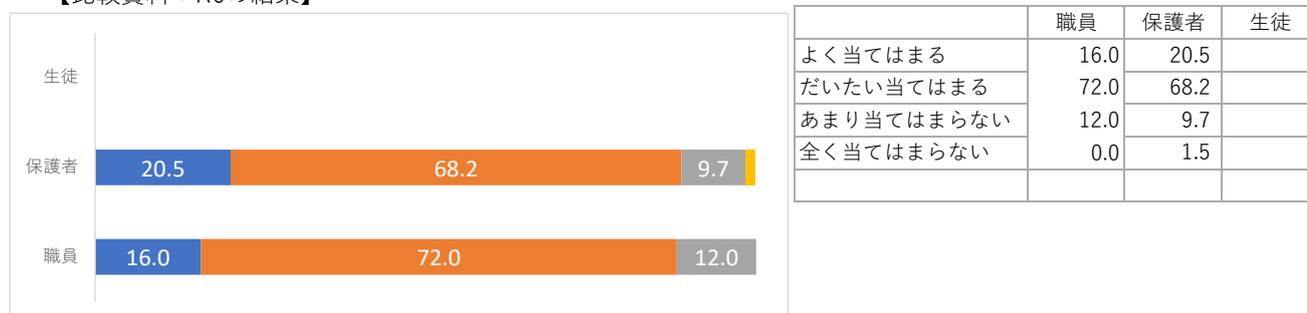
分析

- ・保護者の94.6%、職員の80.0%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答し、教育方針や教育活動の様子の説明に対して比較的高い評価を示している。
- ・昨年に比べて、保護者の「よく当てはまる」が13.5%増加、「あまり当てはまらない」が4.9%減少している。

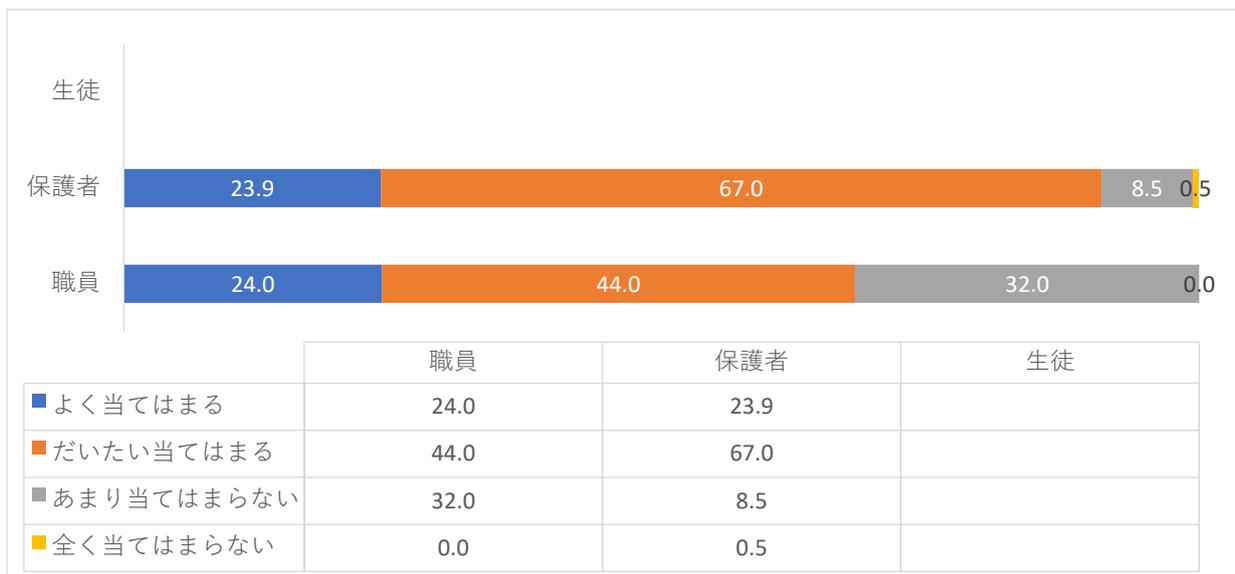
○総括

- ・昨年度から、アプリ「tetoru（テトル）」を運用し即時性のある情報発信を行っている。今年度は主幹から「教育活動の様子」を毎週末に配信した。早く、正確に情報を伝えることができるようになり、保護者から良い評価を得ることができた。
- ・今年度も「一斉同報メール」の登録はしているが、使用していないため、検討の必要がある。
- ・配信経路が「tetoru」「プリント」と複数になっているので整理を進めたい。
- ・教育方針や教育活動が十分に伝わっていないと感じている保護者が5.3%まで減少したが、職員の評価が下がっている。今後も教育活動の理解を得るため、低下の要因や不十分な理由を明らかにし、保護者・地域と協働した教育活動を展開していくことができるようにしていきたい。

【比較資料：R6の結果】



5 学校は、積極的に保護者・地域の方々と接する機会を設けているか



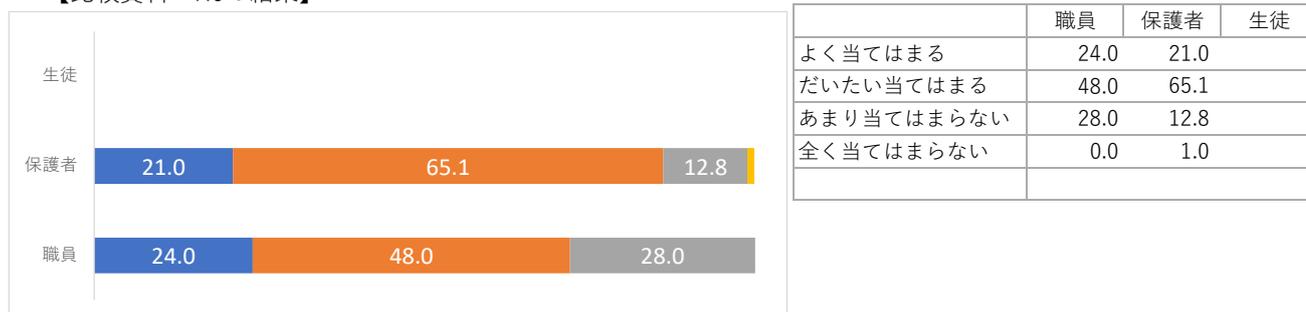
○分析

- ・保護者の90.9%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答し、保護者や地域の方々と接する機会の設定に対して高い評価を示している。
- ・一方、職員の32.0%が「あまり当てはまらない」と回答している。

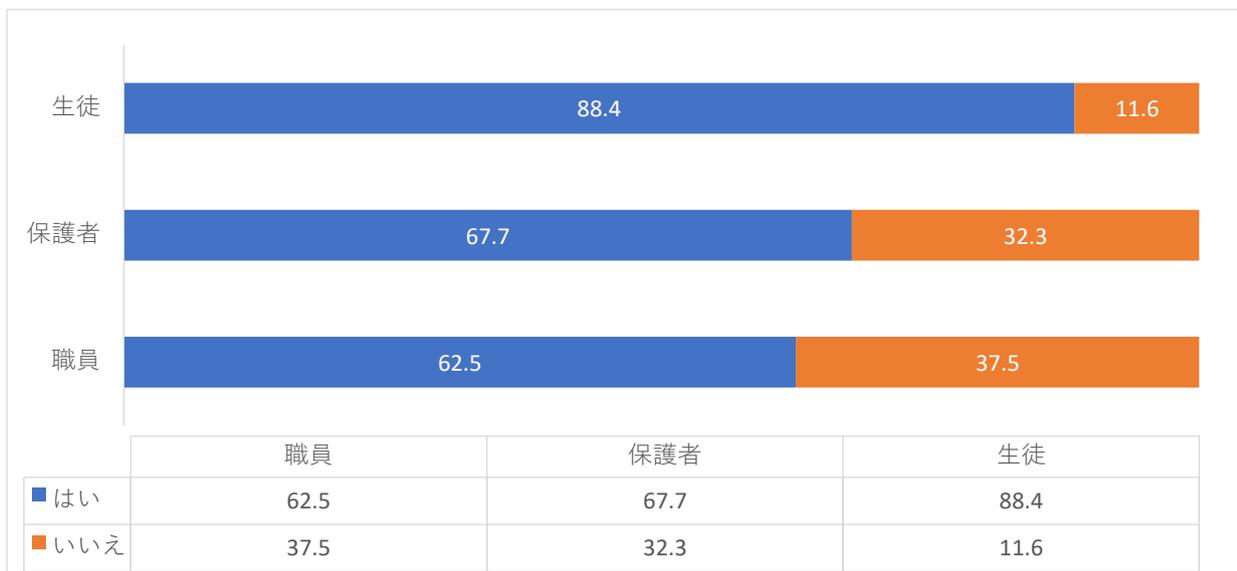
○総括

- ・昨年に比べて、保護者の評価が高くなっているのに対して、職員の評価が低くなっている。それぞれの要因を明らかにし、方策を検討する必要がある。
- ・今年の保護者や地域の方々と接する機会は昨年並みであった。他校での実践などを参考にして接する機会を増やしていきたい。

【比較資料：R6の結果】



6 【1年生のみ】 チーム担任制での指導体制に満足しているか



○分析

- ・生徒の88.4%が「はい」と回答し、チーム担任制での指導体制に対して高い評価を示している。
- ・一方、「はい」と回答した保護者が67.7%、職員が62.5%と生徒に比べ、20%程度下回った。

○総括

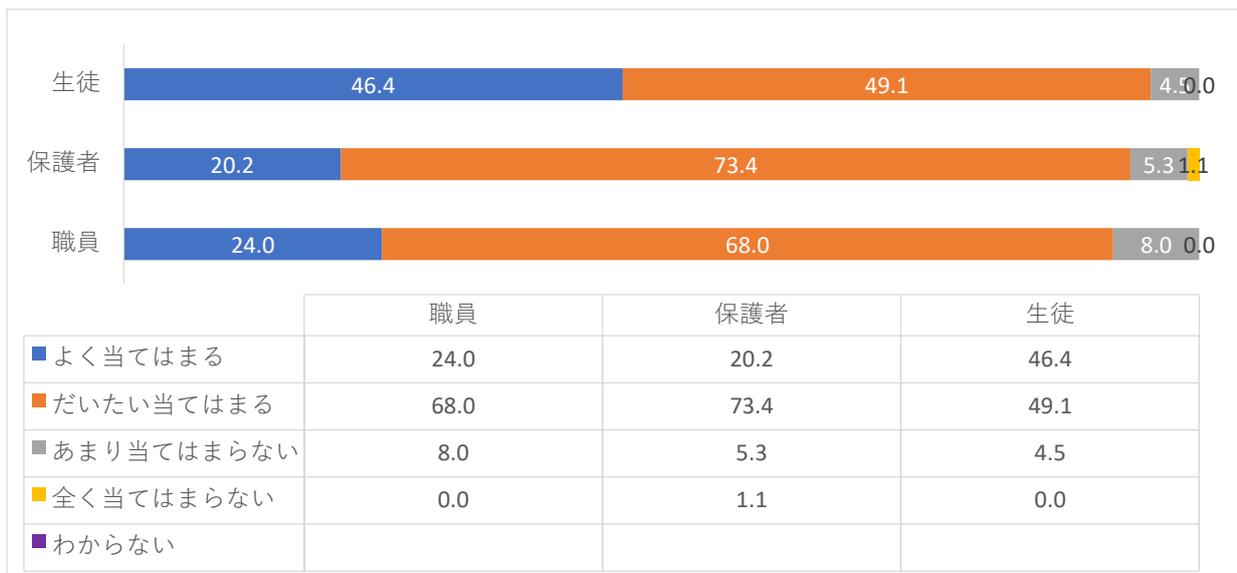
- ・生徒からはチーム担任制に対して、良い評価を得ることができている。自由記述にもあるように、複数の先生と接することができたり、相談できる先生が複数いることが評価につながっている。
- ・保護者の自由記述にも生徒と同様の良い面が記載されている。その一方で、十分な情報共有ができていないのか、責任逃れをしているのではないかと、良いところがあまり感じられないなどの意見もあり、チーム担任制の成果を子どもの変容した姿で示していく必要がある。
- ・職員の自由記述には、メリットとデメリットの両面の記載があり、チーム担任制の充実を図るための方策を検討していく必要がある。

【比較資料：R6の結果】

	職員	保護者	生徒
生徒			
保護者			
職員			
	よく当てはまる		
	だいたい当てはまる		
	あまり当てはまらない		
	全く当てはまらない		

II. 先生について

1 先生は、「話し合い活動」や「協働的な学習」の工夫など、子どもたちが学びの中心となる授業づくりを心がけているか



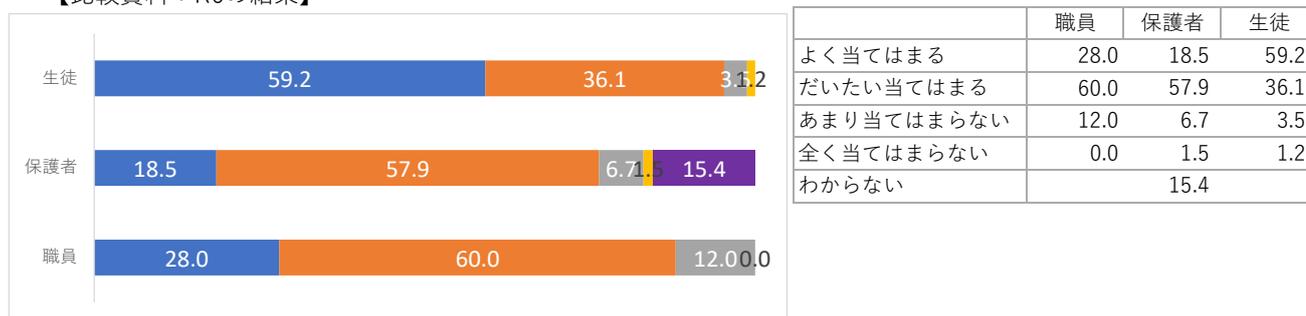
○分析

・生徒の95.5%、保護者の93.6%、職員の92.0%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答しており、生徒が主体となった授業づくりに対して非常に高い評価を示している。

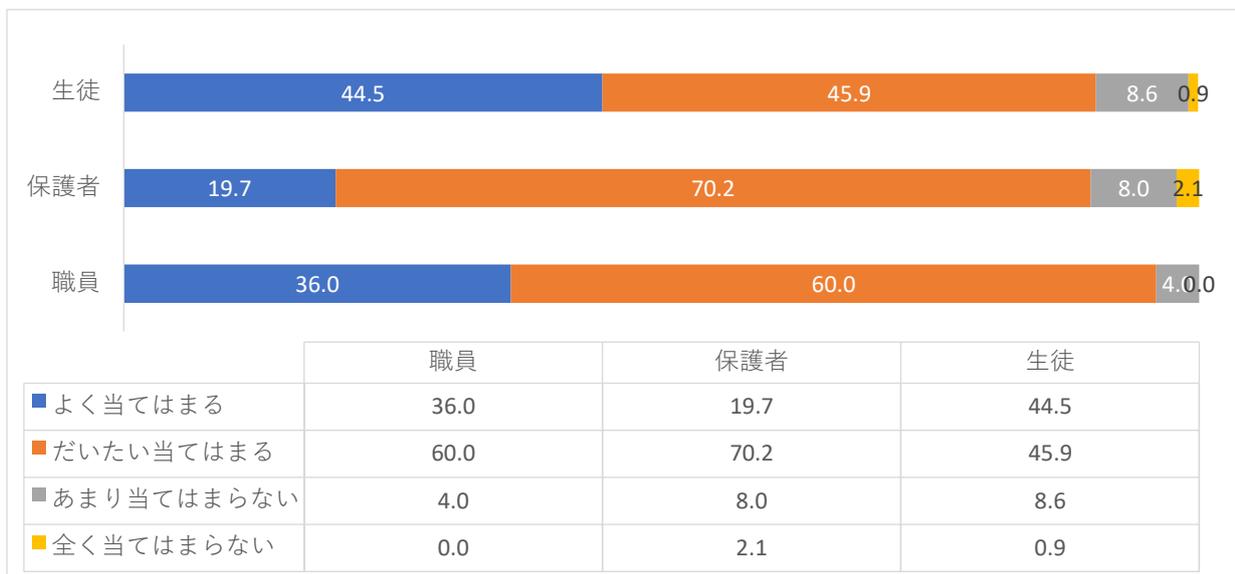
○総括

・「協働学習」は生徒同士が話合ったりアイデアを出し合ったりする中で協働して課題解決を図る学習である。生徒の95.5%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答していることは、日々の授業の中で協働学習が位置付けられていることを示している。

【比較資料：R6の結果】



2 先生は、生徒の悩みなどに適切に応じて指導しているか



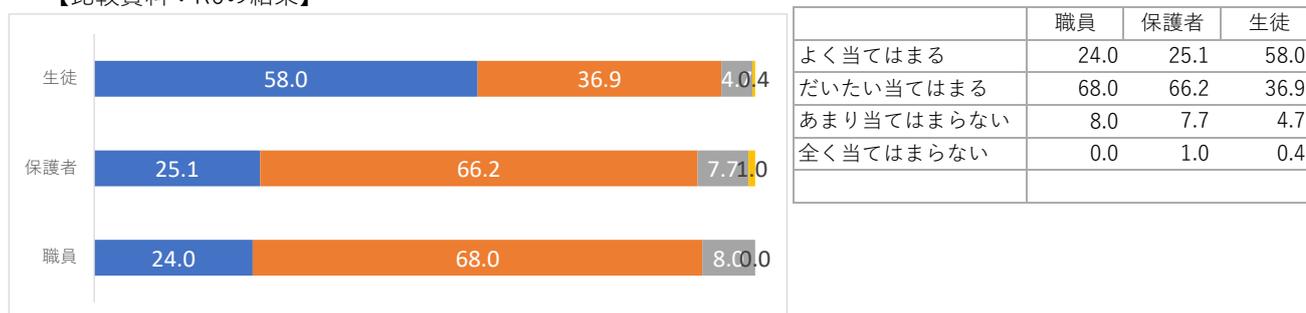
○分析

- ・生徒の90.4%、保護者の89.9%、職員の96.0%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答しており、生徒の悩みなどに対する指導に対して高い評価を示している。
- ・昨年に比べて、「よく当てはまる」が生徒で13.5%減少、保護者で5.4%減少している。

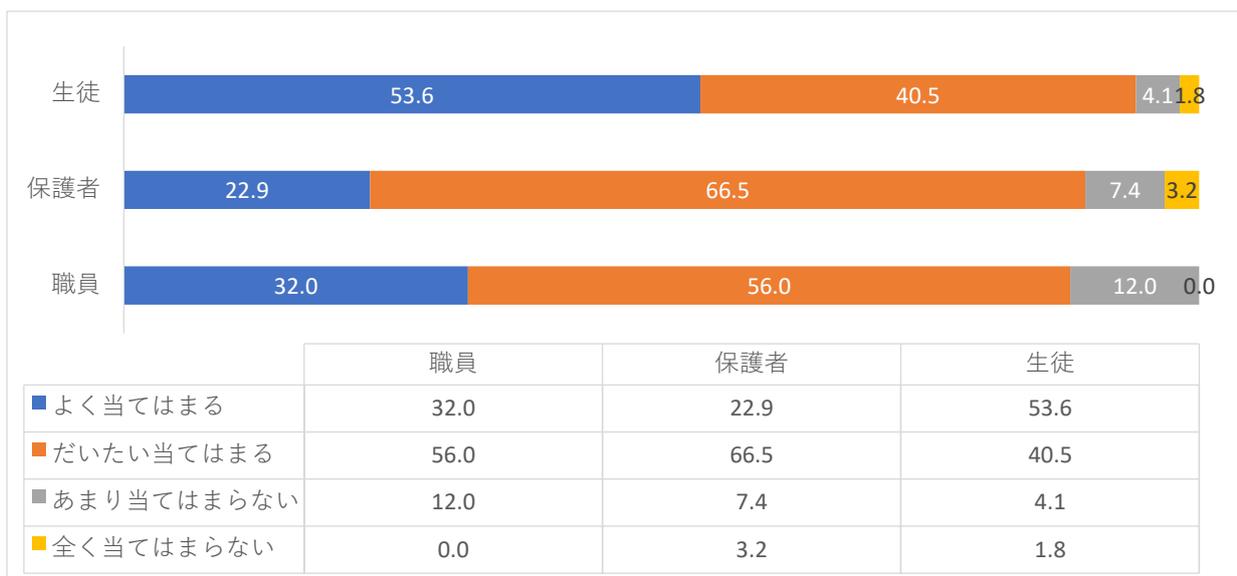
○総括

- ・生徒の悩みへの対応に生徒、保護者、職員のいずれも高い満足度を示している。全学年で教育相談を年に2回実施し、1学年ではチーム担任制を導入し、生徒との関係性を強める中で、教師に相談しやすい雰囲気をつくることのできたためと考えられる。
- ・三者において、「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」がいることから、これらの回答ゼロを目指した取組を進めていく必要がある。

【比較資料：R6の結果】



3 先生は、皆さんのことを理解しようとし、誤った行動に対しては適切に指導をしている
 と思うか



○分析

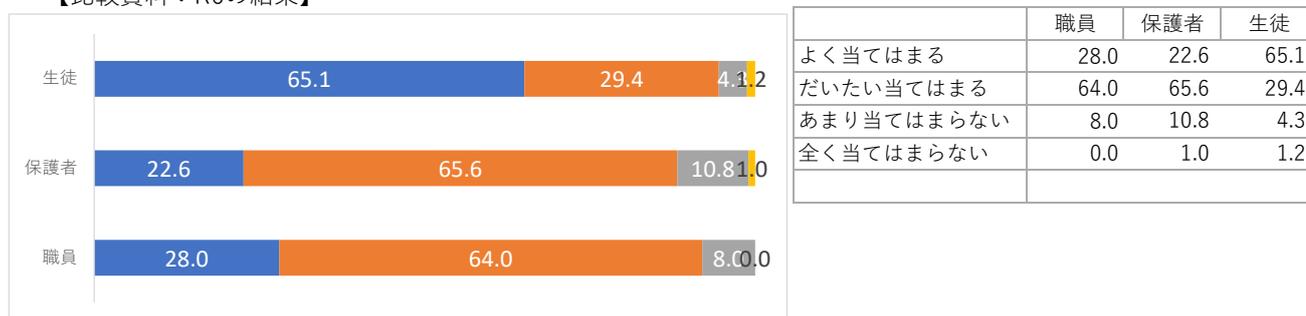
・生徒の94.1%、保護者の89.4%、職員の88.0%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答しており、生徒理解と誤った行動に対する適切な注意・指導に対して高い評価を示している。

○総括

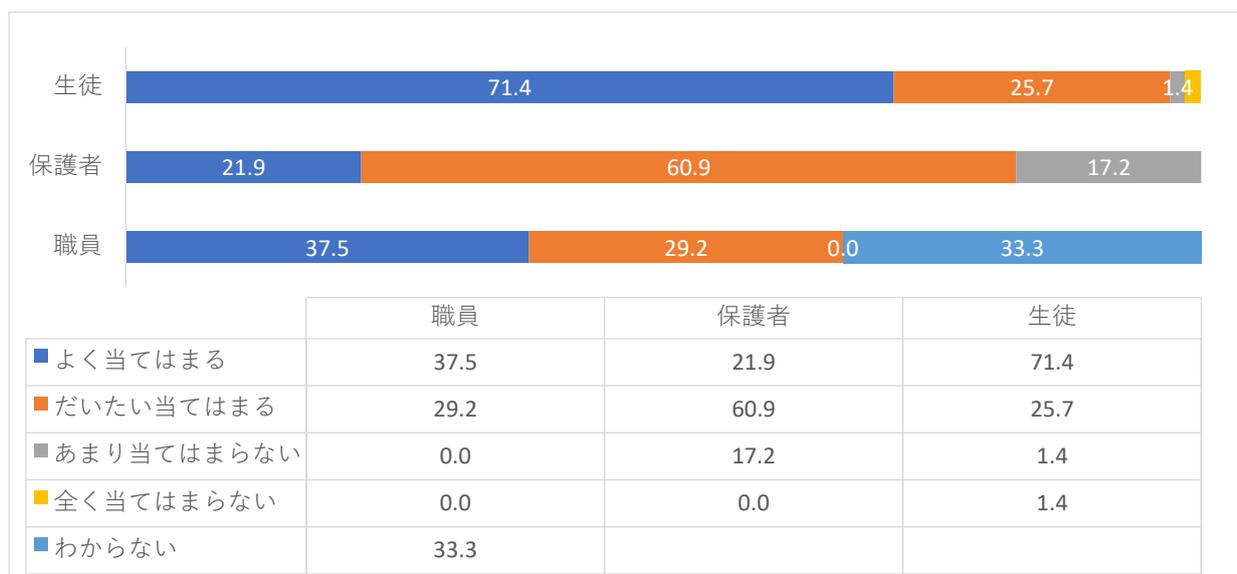
・94.1%の生徒が、安心して学校生活を送ることができていると捉えることができるが、「よく当てはまる」と回答した生徒が11.5減少していることから、その要因を明らかにしていく必要がある。

・高い評価を維持するため、生徒指導の4つの機能（「自己存在感の感受」「共感的な人間関係の育成」「自己決定の場の提供」「安全・安心の風土の醸成」）を生かした生徒との関わりを継続し、保護者との情報の共有を大切にしていきたい。

【比較資料：R6の結果】



4 【1年生のみ】1年生の数学科では、少人数での学習を実施しているが、効果があると感じる



○分析

- ・生徒の97.1%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答しており、1年生の数学科での少人数での学習指導体制に対して非常に高い評価を示している。
- ・保護者の82.8%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答しており、1年生の数学科での少人数での学習指導体制に対して高い評価を示しているが、「あまり当てはまらない」が17.2%と生徒に比べ、15%程度上回った。

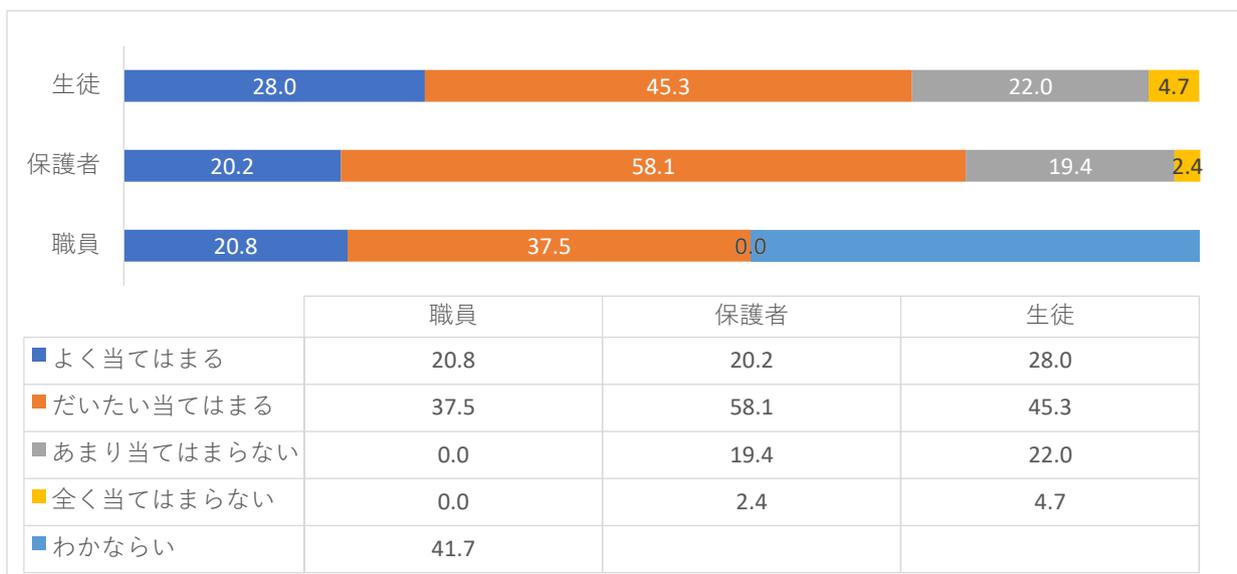
○総括

- ・生徒の97.1%が少人数での学習効果を実感していることから、生徒の声を聴くなどすることで、より主体的に学びに向かおうとする生徒を育てることにもつながると考えられる。
- ・生徒と保護者の評価に差が見られるため、保護者への情報発信の充実を図る手立てを検討していきたい。どのような効果があり、どのように結果に表れているのかなど、具体的な姿で保護者へ発信することもできる。

【比較資料：R6の結果】

	職員	保護者	生徒
生徒			
保護者			
職員			

5 【2・3年生のみ】数学科ではチーム・ティーチングを実施しているが、効果があると思うか



○分析

・生徒の26.7%が「あまり当てはまらない」または「全く当てはまらない」と回答しており、昨年に比べ、15.7%増加した。3年生では39.7%が「あまり当てはまらない」または「全く当てはまらない」と回答した。

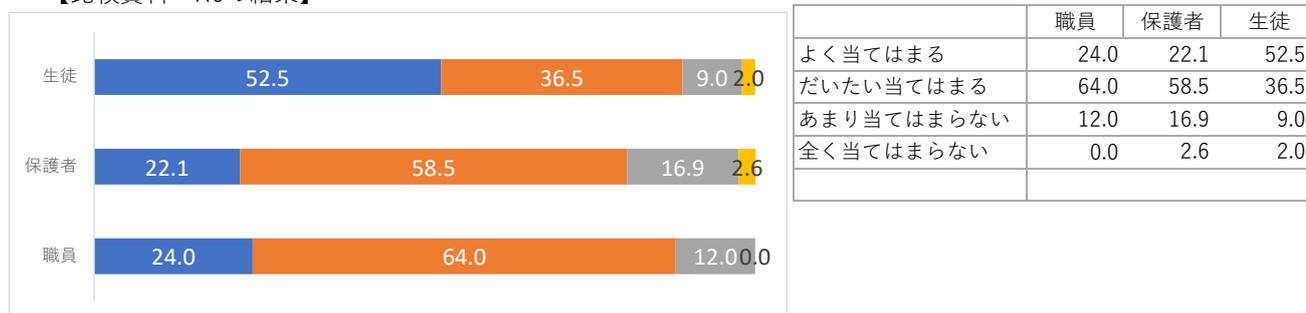
・保護者の78.3%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答しており、昨年に比べて2.3%減少した。

○総括

・昨年に比べ、生徒、保護者の評価が低下した。その要因を明らかにし、さらに自学自習に向かうことのできる指導体制の確立を進めることが必要である。

・少人数での学習と同様に保護者への情報発信の充実を図る手立てを検討していきたい。

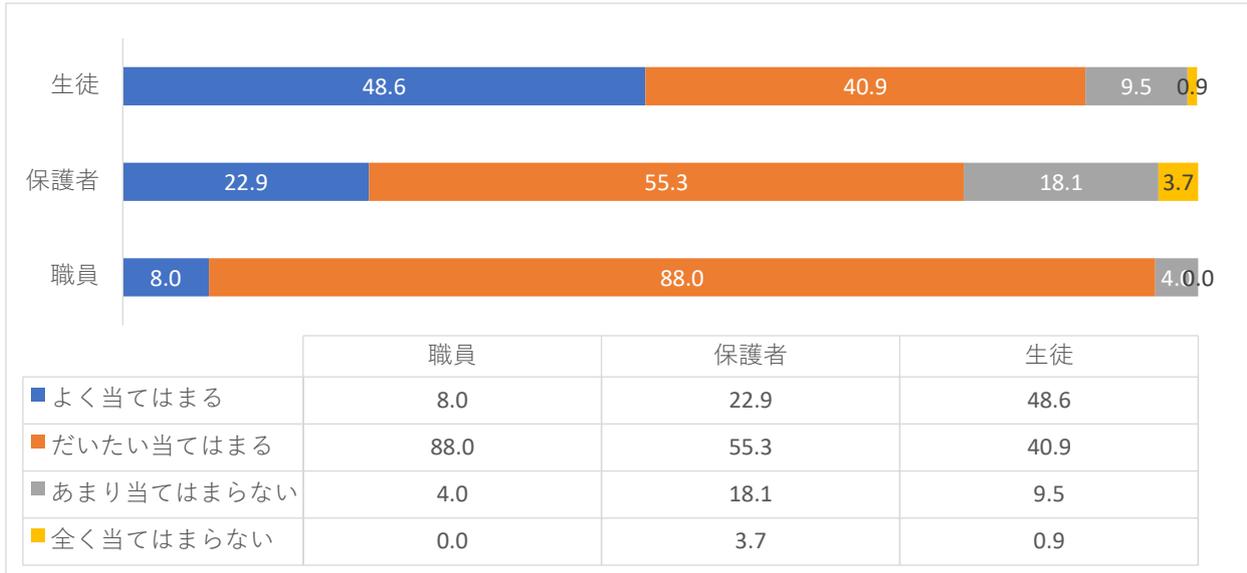
【比較資料：R6の結果】



Ⅲ. あなた自身について

【三者比較】

1 お子さんは、学校での活動（日常生活、仲間との協力、学習）が楽しいと言っているか



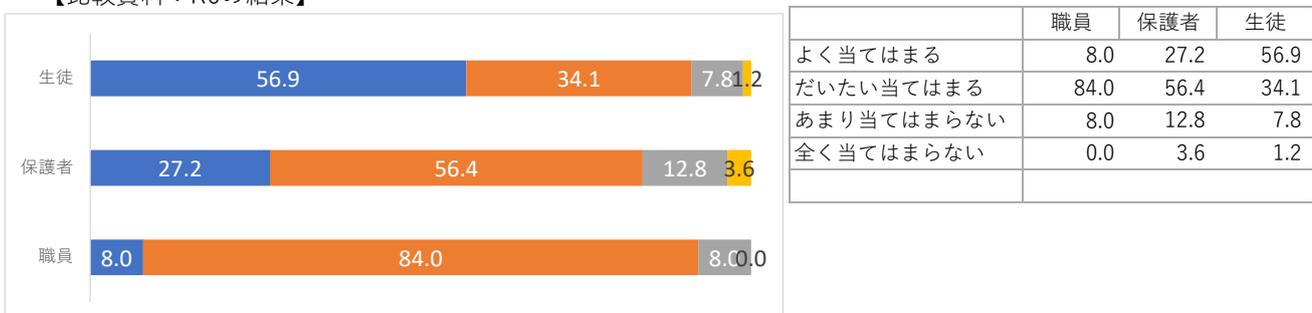
○分析

- ・生徒の89.5%、職員の96.0%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答しており、教育活動に対して高い評価を示している。
- ・昨年に比べて、保護者の「よく当てはまる」の回答が減少し、「あまり当てはまらない」の回答が増加している。

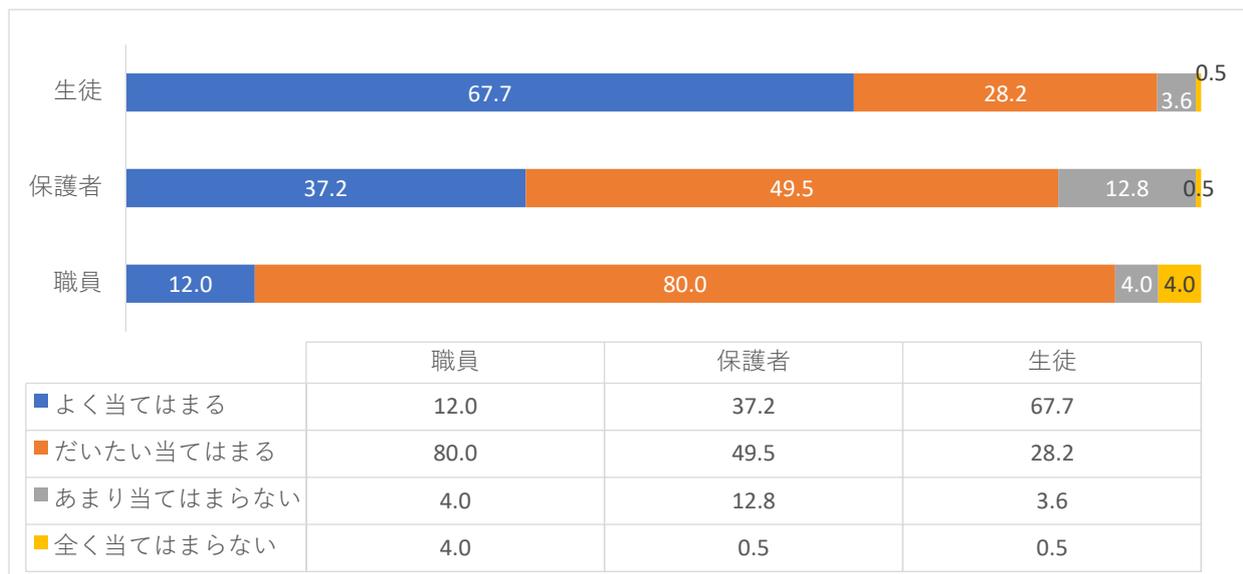
○総括

- ・今年度のさまざまな取組が、生徒にとって「安心感や認め合い、支え合い」を実感する機会となった。
- ・学校祭や生徒総会でのディベート、生徒会企画の防災教室、地域と協働した活動、委員会活動、外部講師による授業の実施など、自ら課題を設定し仲間たちと協働しながら課題の解決に向かう教育活動を行った。生徒から「やりたい」「やってみたい」の声が少しずつ聞かれ、その声が実現されるようになり、ピア・サポートの理念が少しずつ生徒の姿として表れ始めている。このような考えや理念のもと、引き続き地域社会で活躍、貢献できる生徒を育てていきたい。
- ・「生徒が主体となった学校生活」に向け、各教科等の学習の場面では一人ひとりの学習状況や困り感に対応した授業を行っている（個別最適な学び）。

【比較資料：R6の結果】



2 お子さんは、いじめや嫌がらせをされず、学校生活を安心して過ごせているか



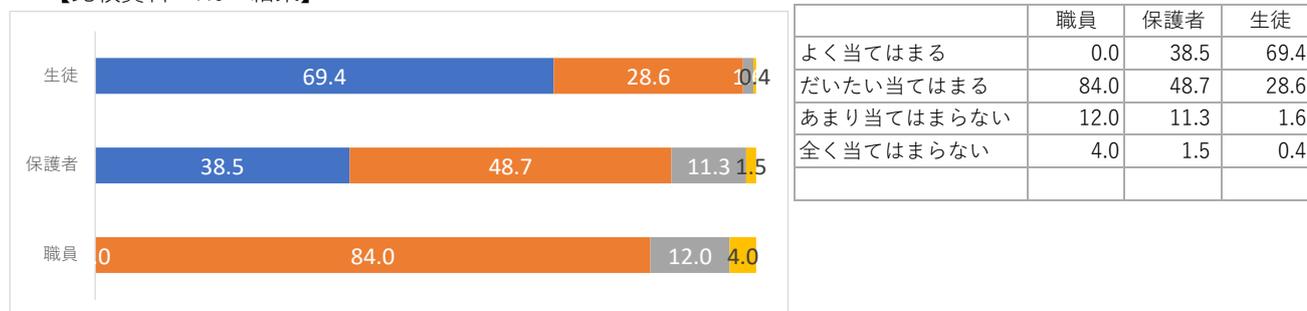
○分析

- ・生徒の95.9%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答しており、生徒の大多数が学校生活を安心して過ごすことができていると感じている。
- ・保護者の86.7%、職員の92.0%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答しており、いじめや嫌がらせをされずに学校生活を送ることができているという評価を示している。

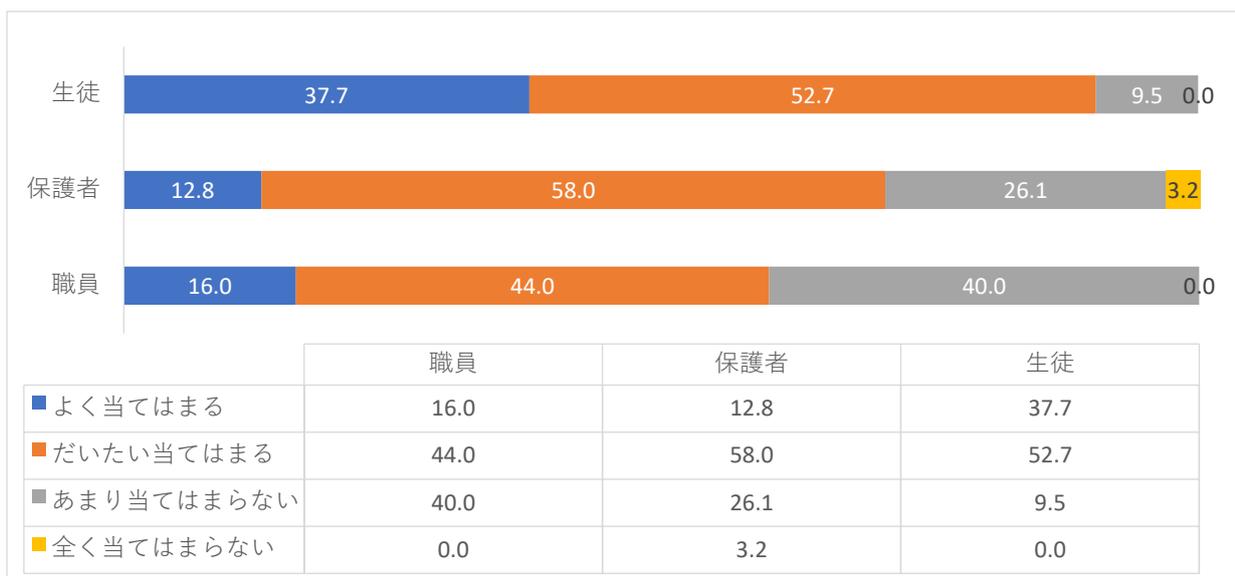
○総括

- ・今年度実施した各種アンケートでは、「嫌なことがあった」と回答する生徒もいた。そのような状況でも、保護者や担任らの支援により困難を乗り越え、新たな一歩を踏み出し続ける生徒たちがいる。ここからも、生徒の精神的な成長、たくましさを感じ取ることができる。
- ・今後も、支えとなってくれる人に相談などして問題を解決・解消したり、ときにはそのような人たちに見守られながら自分の力で乗り越えていく“たくましさ”を育てていきたい。また、他の人には思いやりにあふれ、あたたかみのある学校づくりを進めていくとともに、生徒理解の取組を継続しながら、未然予防と早期発見・早期解決を図っていきたい。
- ・三者すべてにおいて、「あまり当てはまらない」または「全く当てはまらない」の回答があることから、回答ゼロを目標として取組を推進していきたい。

【比較資料：R6の結果】



3 小学校と中学校の連携により、授業や家庭学習習慣、生活習慣について、安心して生活できるように、スムーズな接続の工夫がされていたと感じるか



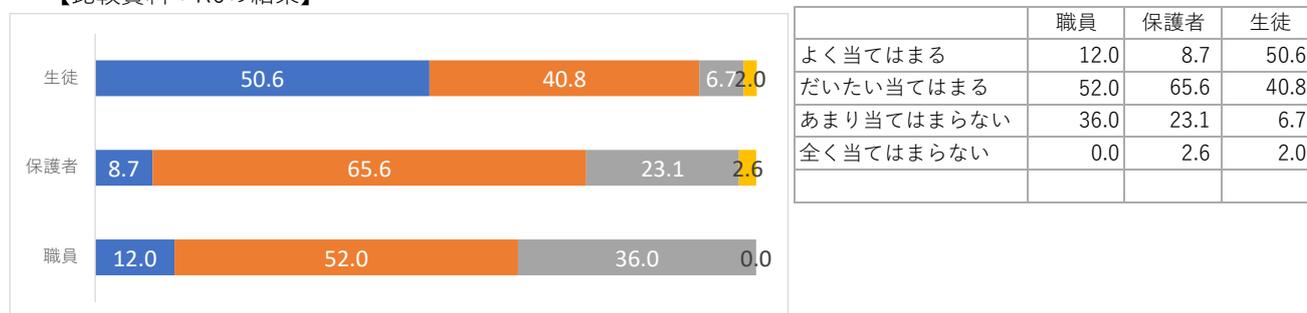
○分析

- ・生徒の90.4%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答しており、小中連携の取組が大多数の生徒の安心感につながっていることを示している。昨年に続き90%を超えた。
- ・昨年同様、生徒の実感と保護者、職員の認識に大きな違いがある。

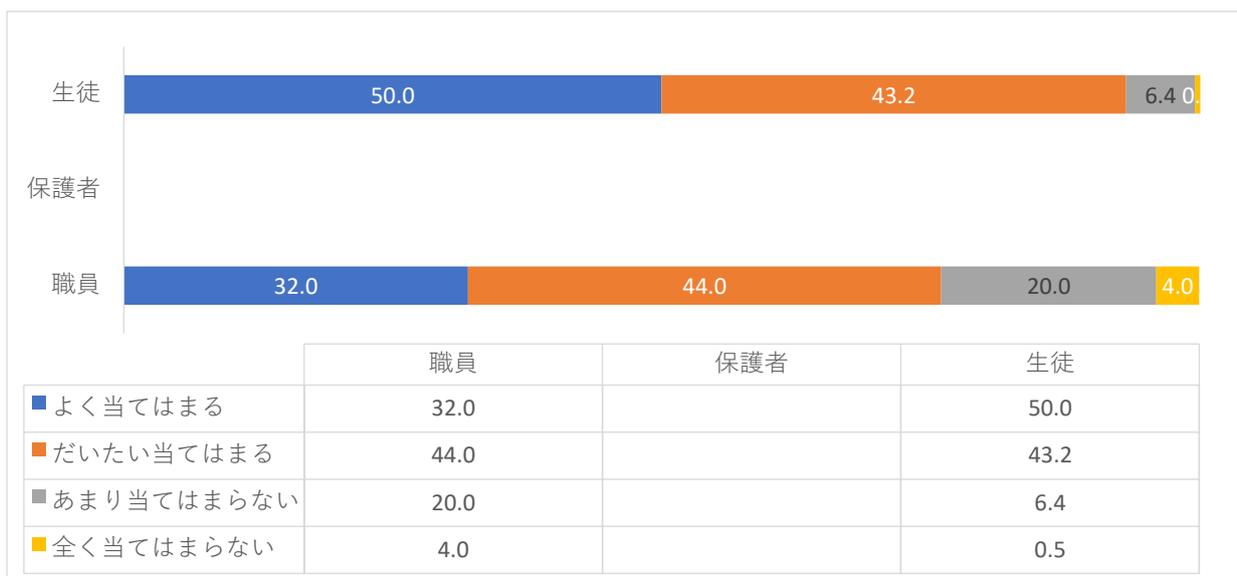
○総括

- ・児童同士が直接交流する場面を複数回設定し、内容を充実させることができた。
- ・1年生では昨年を上回る95.6%が「よく当てはまる」（48.5%）または「だいたい当てはまる」（40.5%）と回答しており、小学生の時に経験した異学年交流会や小学生同士の交流などが、中1ギャップの解消に寄与していることを示している。保護者への取組の成果を発信する工夫を検討していきたい。
- ・保護者、職員においては、学びの連続性や生活習慣などに関する指導の共有を求めるものと理解することができる。この点に関しては、さらに日常的な連携を進めることで、改善を図っていく必要がある。

【比較資料：R6の結果】



4 新しい日課となり、時間を意識して過ごすようになったか



○分析

- ・生徒の93.2%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答しており、日課の変更が時間を意識することにつながったことを示している。
- ・生徒の実感と職員の認識には差がある。

○総括

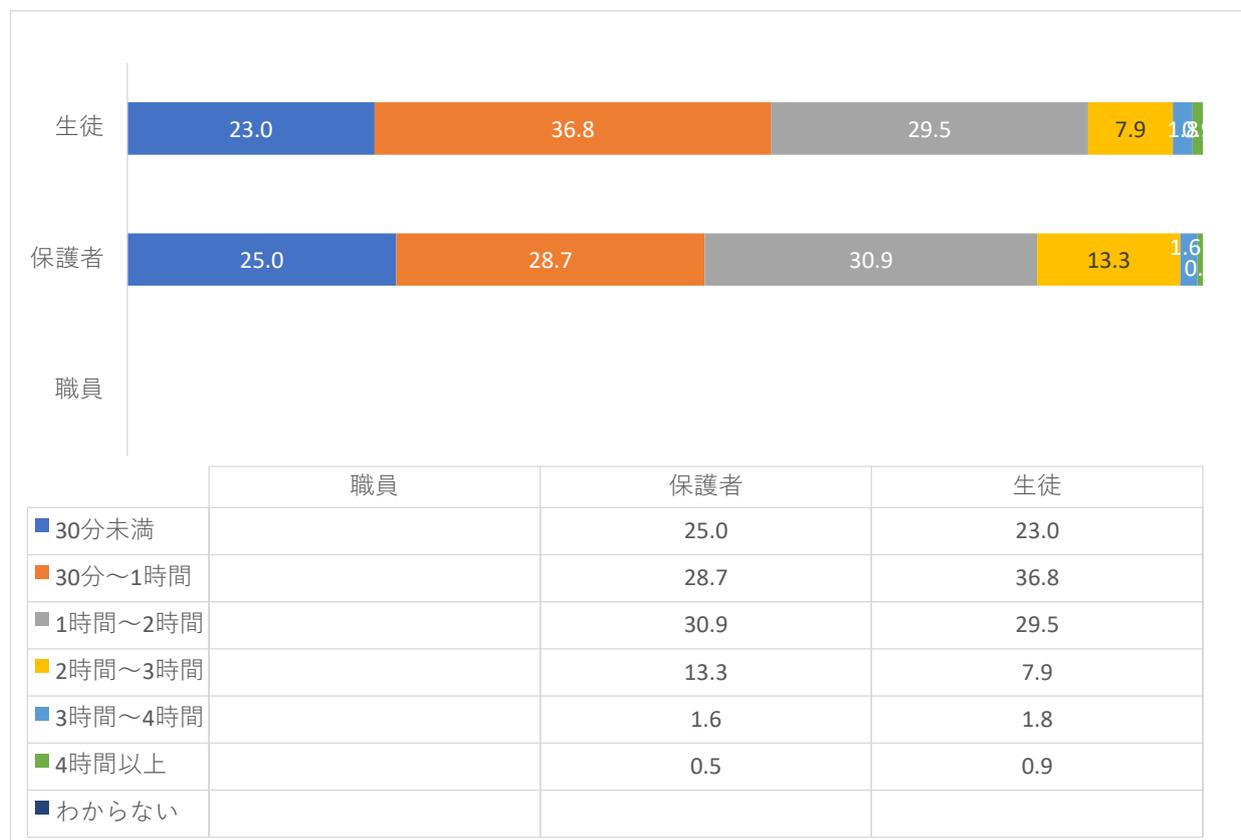
- ・生徒の93.2%が「よく当てはまる」（50.0%）「だいたい当てはまる」（43.2%）と回答し、学年を問わず、大多数の生徒が新しい日課に早く慣れるため、時間を意識して生活したと考えられる。
- ・生徒の実感と職員の認識の差の一因として、5分休みで移動が間に合わないことが考えられる。今後は時間を意識しても間に合わないという状況が生じないような方策を検討していく必要がある。

【比較資料：R6の結果】

	職員	保護者	生徒
生徒			
保護者			
職員			

IV. 家庭について

1 平日の家庭学習時間（学習塾などでの時間も含めて）



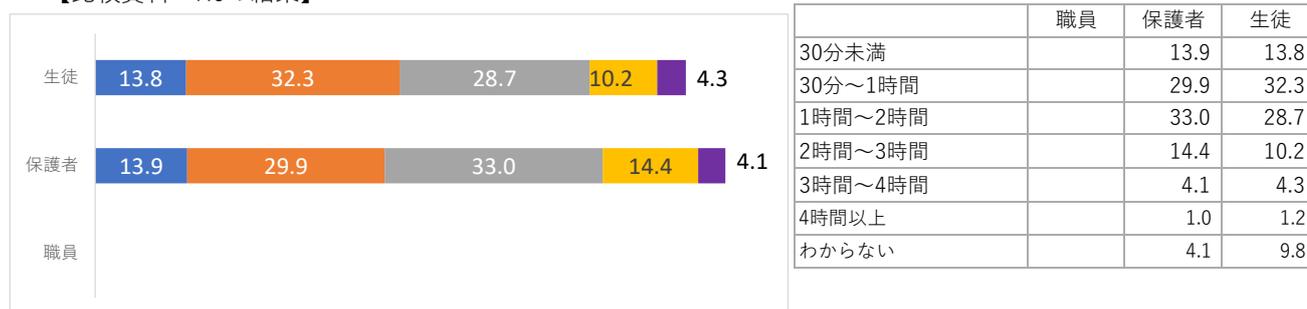
○分析

- ・昨年に比べて、生徒の「30分未満」の回答が13.8%から23.0%と10%近く増加した。
- ・昨年に比べて、保護者の「30分未満」の回答が13.9%から25.0%と10%以上増加している。

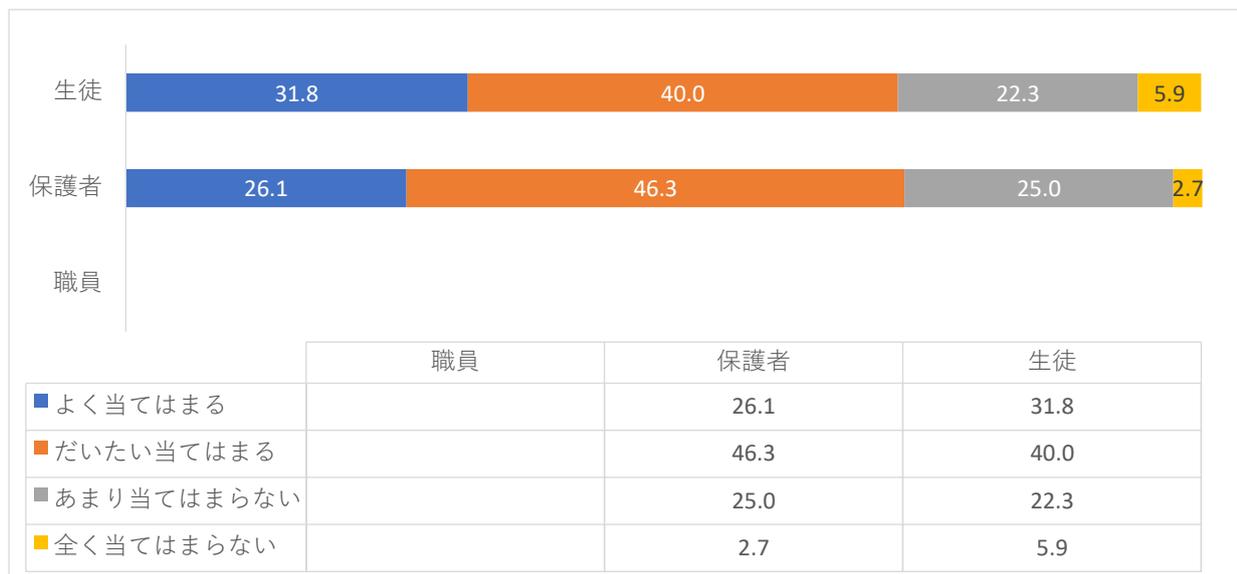
○総括

- ・エデュタイムを活用していると考えても、1時間未満の学習時間の生徒が全体の59.8%であることを受け止める必要がある。学年別に見ると、1年生が67.6%、2年生が72.2%、3年生が39.8%である。これらの生徒を学習に向かわせる方策を検討する必要がある。
- ・どのように家庭学習を進めていくと自分自身のためになるのかを生徒と話し合い、生徒が主体となった学習習慣の定着に向けた取組を進めていくことが求められる。個別性の高い取り組み方が望ましい。
- ・授業と結びつける方法や家庭学習の必要性、必然性に気付かせるために、「しなければならない→したい」「何のために学習するのか→こんなことを学びたい」などを生徒と共有しながら進める方法がある。

【比較資料：R6の結果】



2 お子さんは、学校の様子をご家庭で話しているか



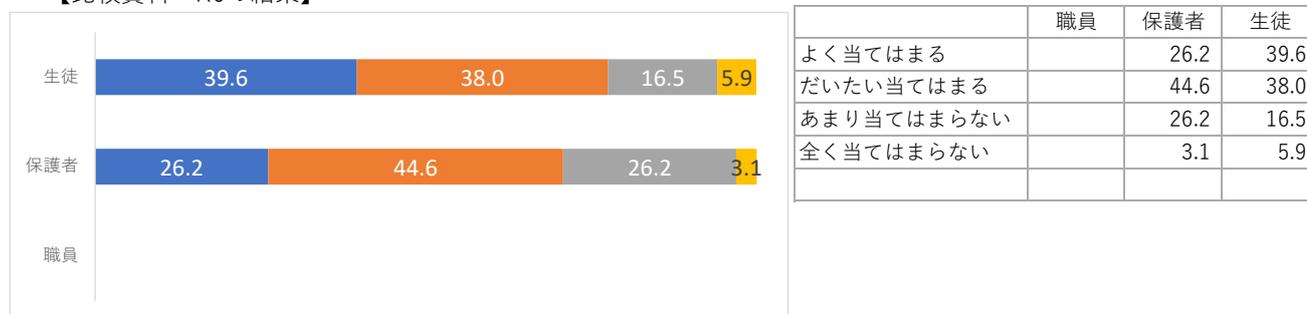
○分析

- ・生徒の71.8%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答しており、昨年度と比べて、5.8%減少したが、比較的良好な結果が示されている。
- ・保護者の72.4%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答しており、1.6%増加したが、依然として約30%の保護者が学校のことを話題にしていない結果が示されている。

○総括

- ・生徒の「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」の回答が5.8%減少した。
- ・生徒と保護者が学校生活について話題にすることは、保護者にとっては学校生活や教育活動の様子を理解・把握することにつながり、生徒にとっては保護者は自分に関心があるという安心感を強化する側面がある。親子の会話は大切にしていってほしいものである。tetoru配信の際に「子どもとの会話を大切にしているか」「親から話しかけているか」などの意識を啓発する関わりも必要かもしれない。
- ・学校としては、引き続きより魅力的な教育活動を創造していくとともに、生徒・保護者が学校のことを話したくなるような情報発信の仕方を工夫していく必要がある。

【比較資料：R6の結果】



3 平日に自由に使える時間



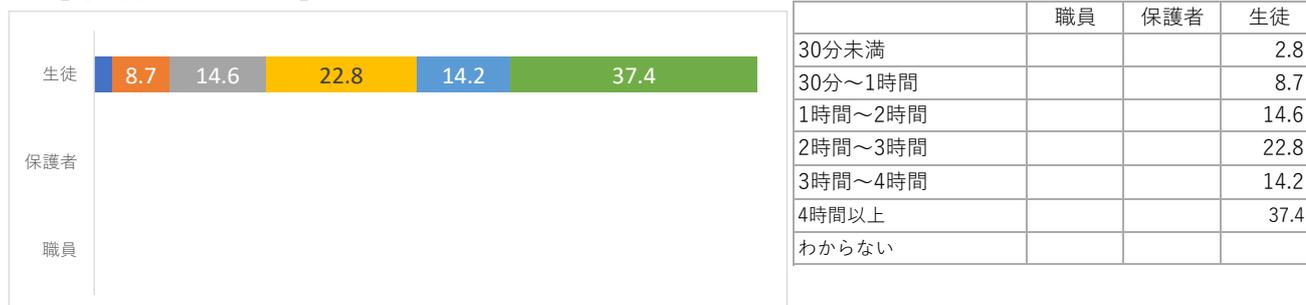
○分析

- ・生徒の8.4%が1時間以下と回答し、昨年に比べて3.1%減少し、59.2%が3時間以上と回答し、昨年に比べて7.6%増加した。
- ・今年度の部活動の下校時刻は、4～9月が17:30、10～3月が17:15であった。

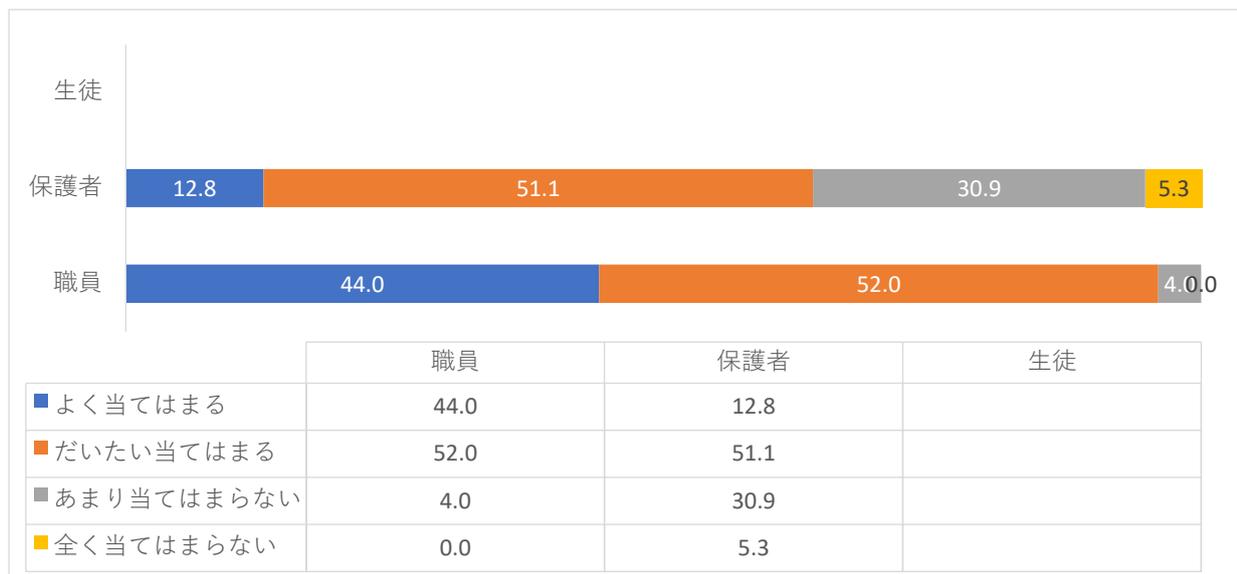
○総括

- ・夏の下校時間が昨年の18:15から17:30に変更になったことが、自由に使える時間の増加につながったと考えられる。
- ・3時間以上、自由に時間を使うことのできる生徒が59.2%と増加したが、家庭学習時間が1時間以下の生徒が59.8%に増加しており、学習時間が短く、自由に過ごす時間が長い生徒が比較的多いことが明らかとなった。
- ・自由に過ごせる時間の使い方を生徒に考えさせる方策を検討していく必要がある。

【比較資料：R6の結果】



4 お子さんのことなど、学校とは連絡をとるようにしているか



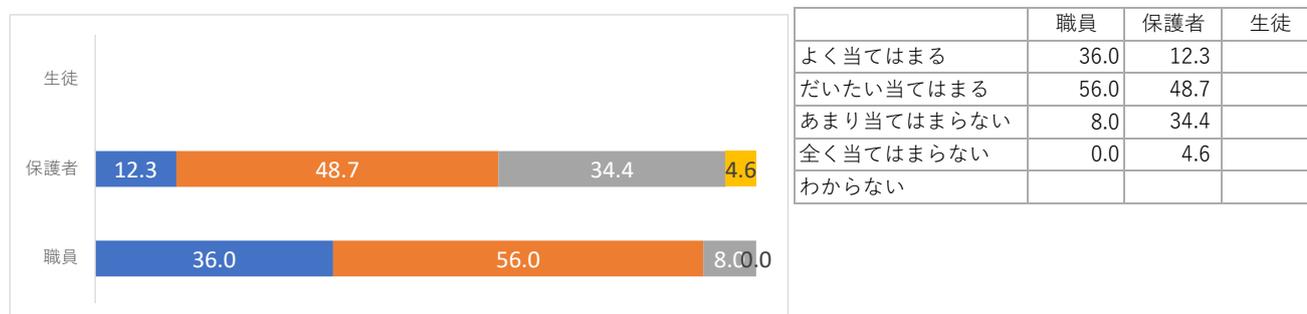
○分析

- ・保護者の63.9%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」の回答し、昨年に比べ微増した。
- ・職員の96.0%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答しており、保護者の実感と差がある。

○総括

- ・欠席連絡がteturuで行えるようになり、各種文書をteturuで配信していることもあり、保護者としては学校に連絡を取る案件が減っていると肯定的に受け止められる。
- ・ここでいう「連絡を取る」とは、必ずしも問題行動等のネガティブなものだけでなく、良いことを発信していくことも含まれている。何か起きたら連絡するというだけでなく、日常的に気になることや心配なことなどと一緒に日頃の頑張りの様子などを伝えるようにする。欠席生徒への健康状態の確認の連絡では、生徒、保護者への心配りに加えて、日頃の様子がとても伝えやすいものである。このように良い面での連絡を続けることで、職員の100%が「よく当てはまる」と回答できる状態、そしてネガティブな内容も保護者と連絡を取り合うことのできる関係づくりを学校全体で目指したい。

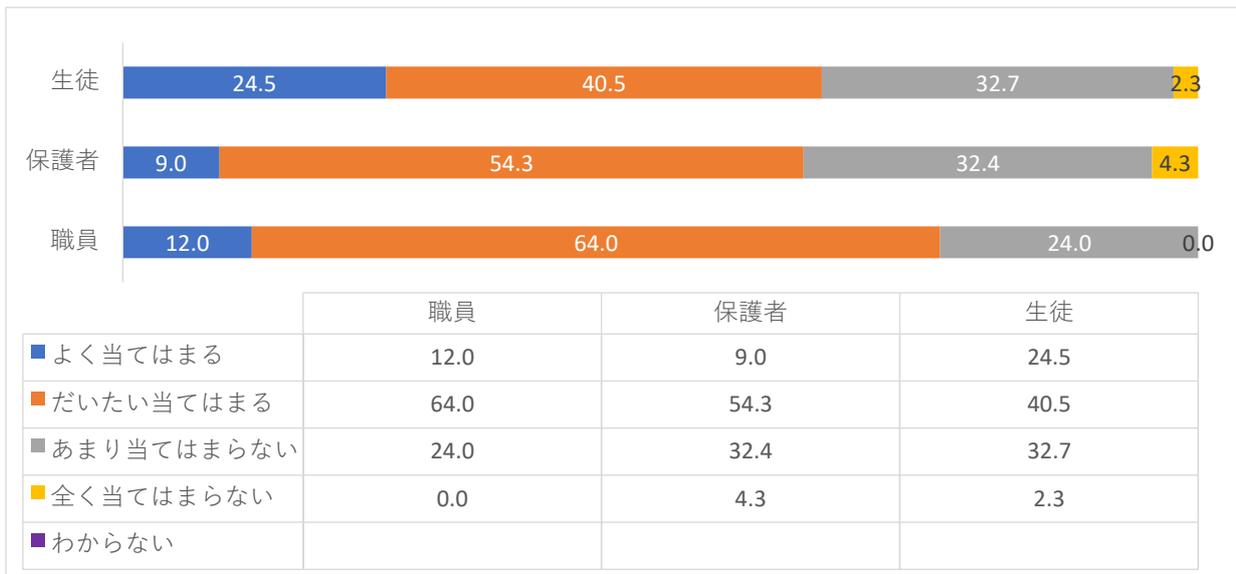
【比較資料：R6の結果】



V. 小学校・中学校共通設定項目

【三者比較】

1 子どもたちは、自分の考えを（ノート・発言・挙手などで）進んで表現していると感じているか



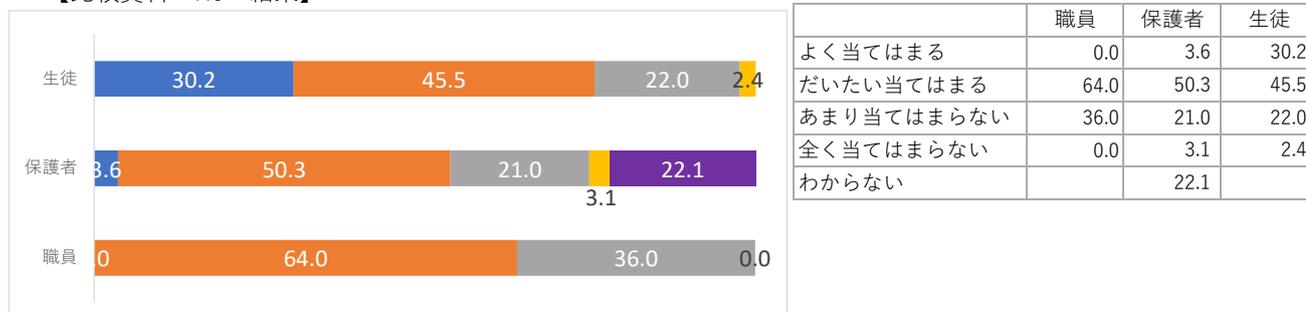
○分析

- ・生徒の「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」の回答が65.0%で、昨年に比べて10.7%減少した。
- ・保護者の「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」の回答が63.3%で、昨年に比べて9.4%増加した。
- ・職員の「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」の回答が76.0%で、昨年に比べて12%増加した。
- ・生徒、保護者の実感と職員の認識に違いがある。

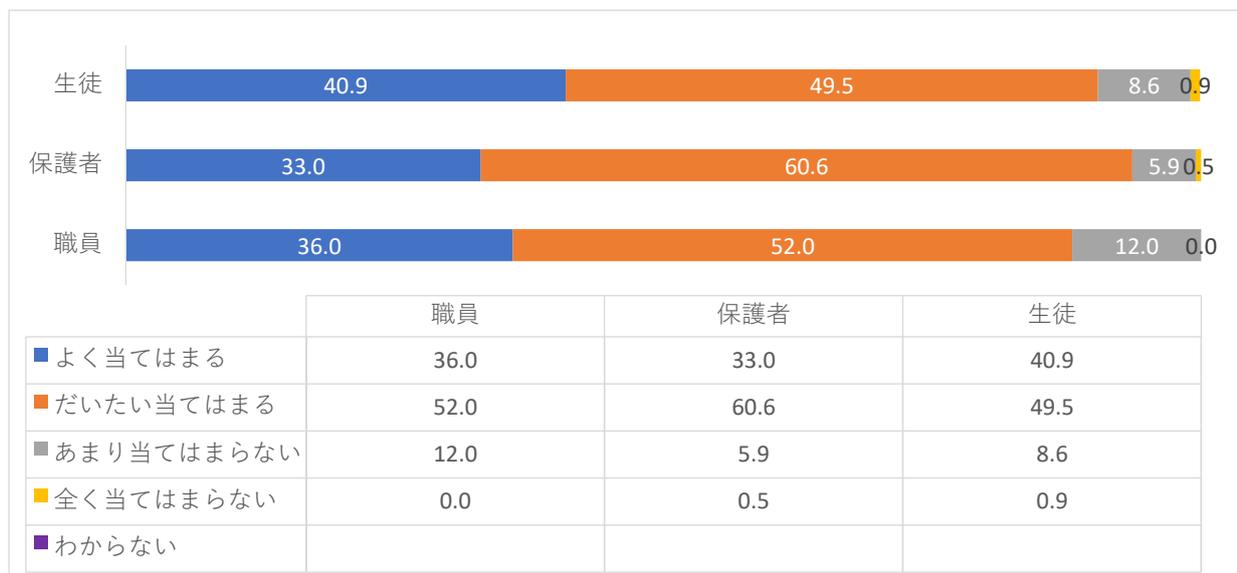
総括

- ・職員の「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」が増加したのに対して、生徒の同項目が減少している。タブレットを活用し、ロイロノートなどで提出したものを自分の考えの表現と捉えるかにより、このような結果になったことが考えられる。
- ・ピア・サポートを基盤とした学級づくり、協働学習の積み重ねにより、生徒に「安心感と支え合い、高め合いのある学校」を実感させるとともに、クラスメイトが自分の話を受容・共感・傾聴の姿勢で受け止めてくれるという安心感が持てるよう学校全体で取組を継続していく必要がある。

【比較資料：R6の結果】



2 子どもたちが、授業中にipadを積極的に使っていると感じているか



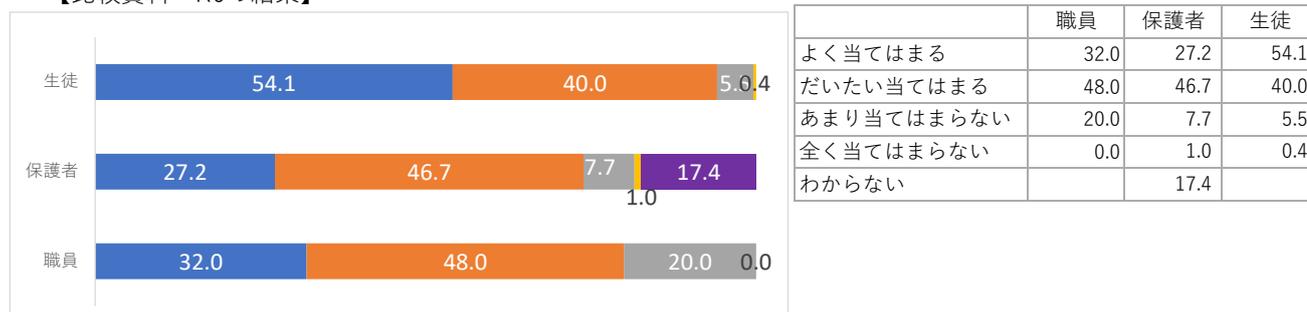
○分析

- ・生徒の90.4%、保護者の93.6%、職員の88.0%が「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答しており、授業中にiPadを積極的に使っていると感じている。
- ・昨年に比べて、保護者と職員の「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」の回答が大きく増加している。

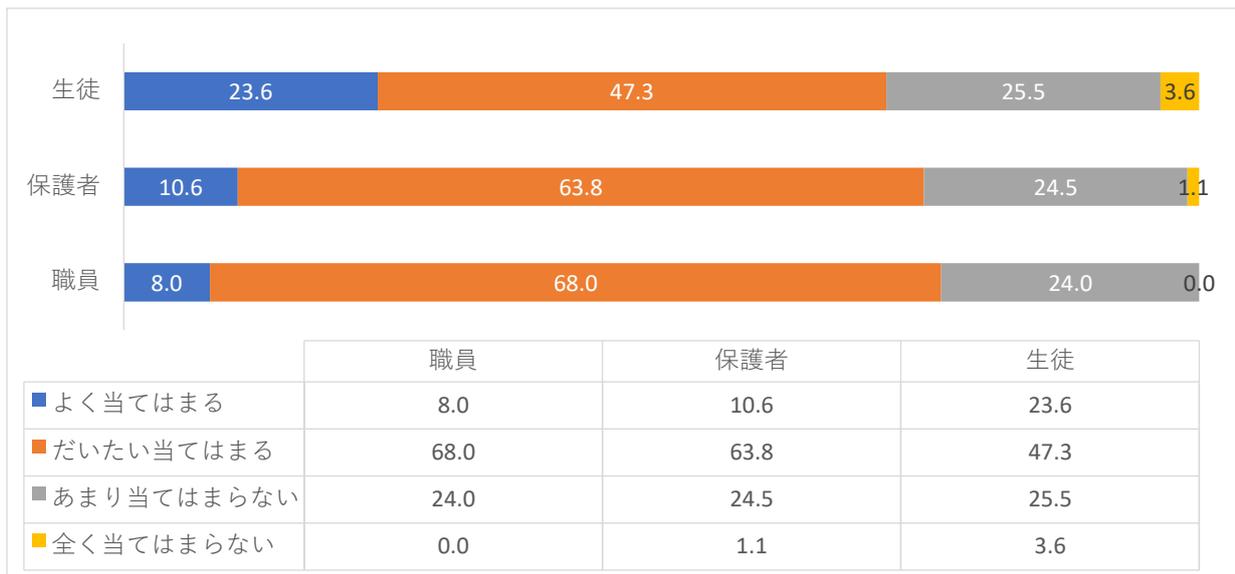
○総括

- ・生徒自身が授業の中で分からないことや疑問に思ったことなどを追求したり、記録や整理、説明、発表をする上で補助的な道具として活用することができるようになっている。
- ・昨年見られた、生徒と保護者、職員の認識の違いが解消されている。

【比較資料：R6の結果】



3 子どもたちは、自分の良さを理解していると感じているか



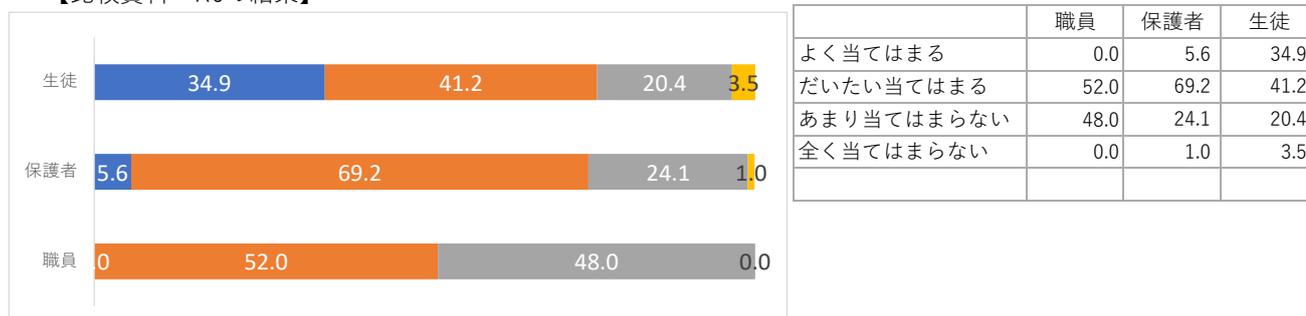
○分析

- ・昨年に比べて、自分の良さを理解していると感じている生徒が70.9%と5%程度減少した。
- ・「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答した保護者が74.4%で、子どもたちの良さを認識していることがうかがえる。
- ・昨年に比べて、「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答した職員が76.0%と24.0%増加し、生徒、保護者の認識との差がなくなった。

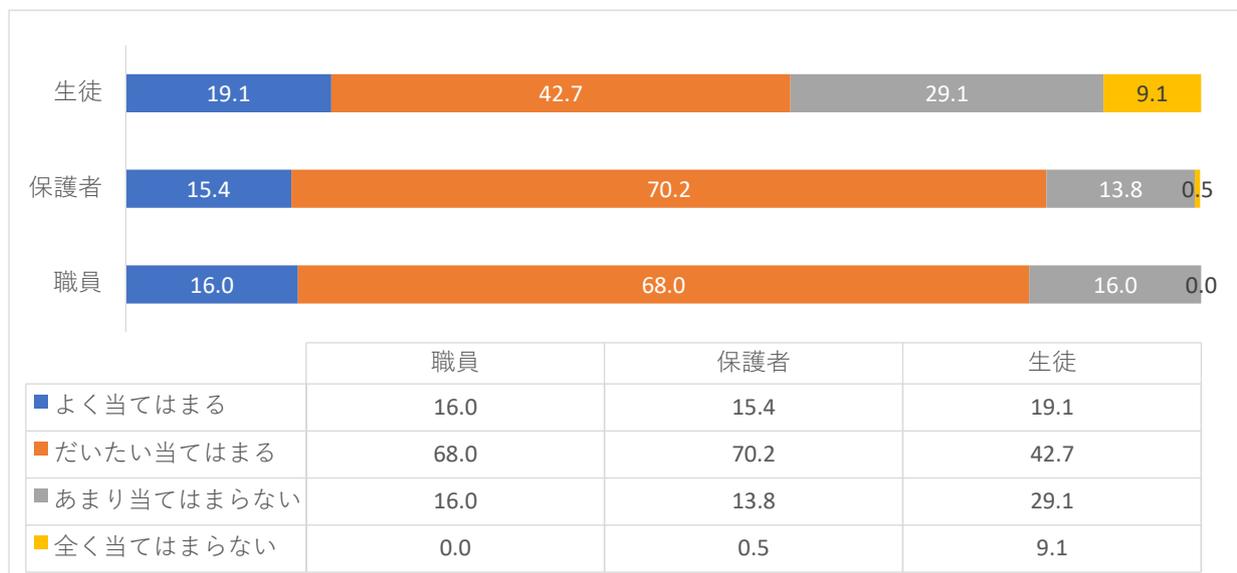
○総括

- ・昨年に比べて自分の良さを理解している生徒が減少したが、職員の評価は大きく上がっていることから、学校生活において、これまで以上に一人ひとりが自分の良さを理解できるよう支援するとともに、自らの良さを実感・発揮することのできる場面を設定していく必要がある。

【比較資料：R6の結果】



4 学校と地域は協力し合えていると感じているか



○分析

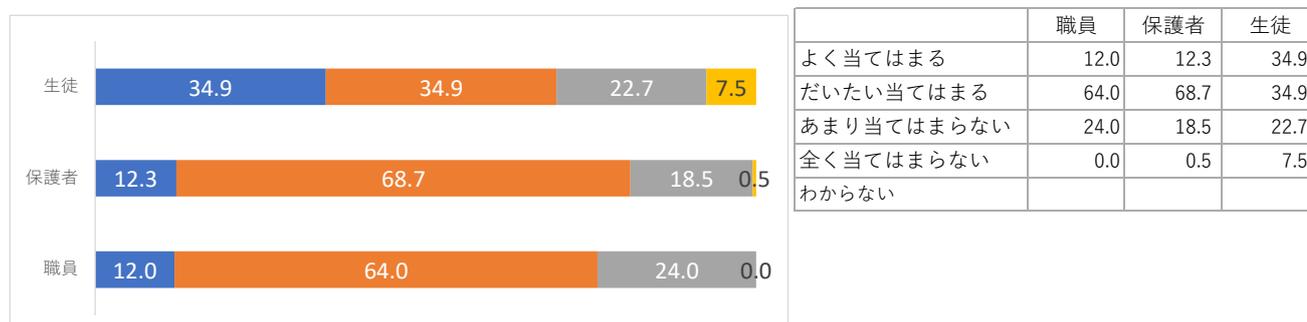
・「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」と回答した生徒が、8.0%減少したが、保護者、職員では増加している。

○総括

・公園清掃ボランティアや長期休業中の学習ボランティア、花壇整備、除雪ボランティアに積極的に参加する生徒が多く見られるようになり、小学生との交流活動が定期的に行われるようになったため、職員の「よく当てはまる」または「だいたい当てはまる」増加したと考えられる。その一方で、生徒の同項目が減少したのは、これらの取り組みが、生徒にとって特別なことではなくなっていると考えられる。

・地域に貢献していこうとする人を育てる視点に立ったとき、教育課程のさらなる改善を検討していく必要がある。

【比較資料：R6の結果】



学校評価

【緑中ミーティング】

緑中ミーティング 評価用紙

評価項目	A	B	C	D
1 自己評価結果の内容が適切かどうか。	5			

自由記述

- ・アンケートの結果を踏まえ適切に分析されていると思います。総括からも取組の成果や今後の課題が理解できました。
- ・設問ごとに分析だけでなく、詳細に総括されている。

評価項目	A	B	C	D
2 自己評価の結果を踏まえた今後の方策が適切かどうか。	4	1		

自由記述

- ・総括から、課題に向けてどう取り組んでいくかも伝わりました。高い評価を得ている項目も、さらに充実を目指して行くという姿勢が素敵だと感じました。今後も積極的な取り組みを期待しています。
- ・結果を踏まえ、課題を洗い出し、解決に向けた方向性を示している。

評価項目	A	B	C	D
3 学校の重点目標や自己評価の評価項目等が適切かどうか。	4	1		

自由記述

- ・今年度の新たな取り組みについての項目もあり、子どもたちの実態や保護者の感想も知ることが出来て適切だと思います。子どもたちが「自由に使える時間」の使い方をどのように考えているか、どんな事に使いたいかなども具体的に知りたいです。
- ・学校生活や家庭での生活など幅広く評価の項目が設定されている。

評価項目	A	B	C	D
4 学校運営の改善に向けた実際の取り組みが適切かどうか。	4	1		

自由記述

- ・アンケート結果からも、子どもたちが安心して過ごせる学校づくりに向けた取組が進められていることが分かりました。また、学習環境改善や教育相談など、子どもに寄り添った取組や改善が図られていることについて、一定の成果が感じられました。さらに、ミーティングの中で、生徒・先生ともに「より学ぶ」ことの意識や実践を大切にしている姿勢が伝わり、より良い学校づくりへと向かっていくことが期待されました。
- ・改善への取り組みが進んでいると思う。今後も継続して行き、さらに向上していくことを期待する。
- ・文科省研究開発学校の指定を受け、新たに課題や学びの質の向上に対する取組、先生方のご苦労には敬意を表します。これらの結果や成果が現れるには時間を要すると思いますが、必ずや素晴らしい方向性を導くものになると確信しております。期待しています。

評価項目	A	B	C	D
5 評価結果の集計や分析の仕方、情報公開等が適切に行われているかどうか。	5			

自由記述

- ・ tetoruの活用で学校の様子を伝えられる工夫がなされ、昨年よりも積極的な発信ができていると感じました。学校だよりで、学校評価アンケートの結果が図やイラストで伝えられていて、とても見やすくわかりやすくなっていたと思いました。今後は、保護者だけでなく地域の方にも緑中の魅力をもっと知ってもらえたら嬉しいです。
- ・ アプリ「tetoru (テトル)」の説明を伺い、とても良いものだと感じた。
- ・ 大変分かりやすく、一目で学校の様子がわかります。